

美濃加茂市民ミュージアム

紀 要

第8集

2009

美濃加茂市民ミュージアム紀要 第8集

目次

講演録

逍遙と『早稲田文學』が目指したもの

中島 国彦 ————— 1

研究ノート

大矢峻嶺 はがき、封書について

菊地 由花 ————— 14

史料紹介

「禮物軌式」にみる「枝柿」「美濃柿」「甘干柿」について

可児 光生 ————— 30

逍遙と『早稲田文學』が目指したもの

中島 国彦

1 坪内逍遙のイメージ

早稲田大学文学学術院の中島でございます。このような機会に、坪内逍遙先生の話させていただくことを楽しみにして、参りました。先ほど、美濃加茂市民ミュージアムの特別展示を拝見させていただき、ミュージアムが色々な資料を集めておられ、逍遙を中心として日本の近代文学の流れを鳥瞰する企画を見事に実現しておられるのを、本当に興味深く思いました。わたくしが見たいと思っている早稲田大学所蔵の資料に、こういうところでお目にかかったりもし、改めてうれしく思っております。

逍遙が創刊した『早稲田文學』は、その後ずっと、早稲田大学の文学部、今は文学学術院と称して、昼と夜の学部を再編しましたので、文学部と文化構想学部の二つの学部ですが、その教授会が『早稲田文學』の総元締めとして発行権を持っております。ですから、戦後『早稲田文學』の刊行が中断しております時に、早稲田の学生有志が何人か集まって、『早稲田文學』を出したいので名を使わせてほしいと申し出ても、教授会は承認しませんでした。中断した時期もあり、現在は第十次ということになります。大学から発行資金が出ていますが、雑誌の中身は全て編集の担当者、早稲田の文学学術院の一部の教員と若干の外部の人のグループに託しており、大学総長でさえも中身については一切口を出しません。お金は出すが自由にやってほしい、そういう精神で現在まで続いております。

今回は、文学学術院を代表してわたくしが逍遙先生の話をするわけですが、わたくしの恩師の、亡くなった稲垣達郎先生からうかがった逍遙につい

てのいろいろな話を思い出しながら、知らないうちにわたくしの耳に入ってきている大事なことを、きちんと次の世代に伝える役目の一翼を担って行きたいと思っております。

今回の展示は現在の第十次、そこから登場した芥川賞作家川上未映子さんまで扱われておりますが、わたくしの話で扱うのは、逍遙が推進した第一次『早稲田文學』、その教え子の島村抱月が引き継いだ第二次、そのあたりまでが、先ず一番最初に皆さんに知って置いていただきたい部分です。

さて、地元の美濃加茂市の皆さん方が持っている逍遙のイメージは、どういうものでしょうか。駅を降りて、すぐ逍遙の銅像があります。逍遙先生の故郷にやって来た、という感動をまず持ちます。銅像は、晩年の逍遙の姿ですが、たとえば『新潮日本文学アルバム・坪内逍遙』の表紙の写真を見ても、髭を生やした、もうちょっと髪が白い、立派な晩年の面影があります。ただ、わたくしは、学生には、名前は硬い感じの「逍遙」だけれども、あまり老年のイメージを持たないでほしい、とよく言っています。何故かというと、それは確かに晩年の姿ですけれど、日本の明治の文学で一番大事な近代文学革新の時期、稲垣先生のお話によく出てくる言葉で言うところの文学革命期、そういう時期の逍遙の姿としては、これではイメージが違うのです。髭を生やした逍遙ではなく、もっと若い、具体的に言うところ二十歳代の逍遙を思い浮かべてほしいのです。最初の小説などを書いている時期、明治十八年（一八八五）というと、実は二十五、六歳なのです。二十五、六歳の若者が、本当にわずか数年間だけ、近代文学の大事な文学理論を作って、実作を試み、そして文学雑誌を出すのです。そして、その後は、小説を書くのをやめてしまっただけですね。そして、演劇だとか、国語教育だとか、翻訳だとか、その他の違った方向に行くわけです。白樺派の志賀直哉というと、すぐに晩年の白い髭の志賀直哉を思い浮かべますけれども、志賀直哉は最初からそうした姿ではなく、初期の名作を書いていた時は、まだ若々しかったのです。志賀

直哉は、自転車を後ろ向きに乗ってごくという噂が広まるくらいの、スポーツマンだったのです。名作『暗夜行路』が書かれたのは、ちよつと後になります。

逍遙の文学活動を考える場合、何はともあれ、若い坪内逍遙のイメージを、ぜひ作ってほしいのです。若い時というのは、ある意味では模索の時期です。特に逍遙のように長生きした人は、活躍がずっと長期にわたっていて、この時期にはこう、この時期にはこう、そして晩年になるとシェイクスピアの翻訳を仕上げる、というような形になっているので、一番問題になっている近代文学の革新を果たしたのは、実は二十歳代の若い時期の仕事だということを思い浮かべてもらえたらと思っております。

2 隠された若き逍遙の模索

先ほど、旧尾張藩太田代官所のあった場所に建つ太田小学校に案内していただきましたが、そこでいただいたパンフレットの中にも「あのころ文豪は卵でした」というふうに書いてあります。卵というのは、これからどうなるかわからない存在です。名古屋に出て、明治十年代に東京に渡って、東京大学の前身の開成学校に学ぶわけですけれども、その頃はまだどんな人間になるかわからない。大学で落第もするし、友達にすごい人間がいたりするとう、そういういろいろなエピソードが思い出されて来ます。愛知県で英語を勉強しても、東京大学に行くと、回りにすごい人がたくさんいるわけです。十代の逍遙にとっては、東京は別世界のようなものでした。宿舎に入って友達が出来ます。例えば、同期の高田早苗（*東京専門学校創設に参画。のち総長）という、一歳年下の東京生まれの友達と知り合うと、読んでいる物が違うのですね。

逍遙はご存じのように、子どもの頃名古屋に移って来てから、名古屋の本屋大野屋惣八（大惣）の本を全部読んだという話があります。それくらい

本好きの子でした。その大野屋惣八は非常に有名な貸本屋ですけれども、その本屋さんで読んだ物は江戸の文学、せいぜいレベルが高くて馬琴の『南総里見八犬伝』のような読本、それから多くは戯作、絵の入った草双紙のたぐい。大惣は明治になってからなくなりまして、そこにあった本は全国に散らばりました。判子が押してあるものから、これは大野屋惣八にあった本だということが後でわかるのですけれども、恩師の稲垣先生などは笑って、「大惣の本を時々見るんだけど、逍遙は大惣の本を全部読んだと言っているのだから、そこには逍遙の手あかが付いているよね」と、よくそういう話をなさっておられました。そのくらい逍遙は、大野屋惣八の本で勉強していたのです。江戸文学については、日本一の読書量を誇っていた、と言ってよいでしょう。

しかし、東京に行くと、全然違うわけですね。つまり、横文字の本はほとんど読んでいない。もう時代は横文字の方になっていたので。先輩には何人も優秀な人がいます。例えば岡倉覚三（*のちの美術評論家・思想家の岡倉天心）もいました、それから同級生では、高田早苗は、ほとんど横文字の本を読んで、先輩と最近何を讀んだかと話をするわけですね。スコットの長篇歴史小説『アイバンホー』を讀んでもおもしろかったとか、それから、ユゴーの『レ・ミゼラブル』（もちろん英訳です）はすごいなどと、みんな話しているのです。それを聞いて若き坪内雄蔵は、困ったなと思ひ、がんばるのですけれども、なかなか追い付きません。わたくしも東京の下町の生まれ育ちですけれども、大学に入ると仲間以太宰治の作品を全部読んだという友人がいたりして、一種のカルチャーショックのようなものを受けました。でも、自分もがんばろうと勉強し始めるのも、若者の特権です。逍遙が新たな勉強をしていくわけですけれども、逆に言うと、身に付いたものと違った方向に行くには、それなりの努力がいります。江戸の文学から、英文学、横文字の文学に移って行くためには、江戸の文学を強引に押さえつけない

くていけない、これではだめなのだと思わないといけない。そのところで苦しみもあつたらうと思います。

展示にも、生原稿と掲載雑誌が出ておりましたが、逍遙の回想に、「回憶漫談」という、若い頃のことを後になって回想した、大正十四年（一九二五）七月の『早稲田文學』に載った文章があります。事実の間違いもあります。それを読んでいくと、同級生の高田早苗、後輩の二葉亭四迷、それから文学仲間では、当時東京下谷の根岸に住んでいた、根岸派などと言われている饗庭篁村（*江戸戯作系の小説家。代表作『当世商人気質』など）などの名前が出て来ます。後に、早稲田の図書館長にもなつた市島春城という友人にも出会っています。

友人の名前の他に、東京大学で教わつた先生の名前も出て来ます。東京大学は当時文学部が独立してはいませんので、文学の授業は限られていますけれども、英文学のホートン先生の授業を受けたが、出来が悪かつたということを書いたので、あたかもその授業で落第したかのような伝説になつてしまいました。本当は、早稲田の文学部の大先輩の柳田泉先生（わたくしが大学に入った年度の末に御定年で、その最終講義を一回だけうかがいました）、その先生の調査によると、他の授業で赤点になつて、ホートン先生の方は、何とか通つたらしいということでした。赤点を取つたのは、やはりホートン先生と同じように、外国からやつて来ていた、アメリカの若い先生でした。皆さんご存じのアーネスト・フェノロサ（*アメリカの哲学者・美術研究家）です。日本美術の研究で知られる、あのフェノロサの授業で、赤点を取つてしまつたのです。

実は、このフェノロサも一八五三年生まれで、日本にやつてきたときはまだ二十代の後半なのです。ハーバード大学の哲学科を一八七四年（明治七年）、二十一歳の時に卒業しています。しばらくして、日本に教えに来たわけです。二十歳代後半の、新進の先生です。実は、若い先生の方が、授業で

は厳しいのです。若い先生は、学生が出来ないと、どんどん赤点を付けてしまします。

フェノロサ先生の科目で赤点を取つたけれど、ホートン先生は何かクリアした。でも、点数が悪かつたことは余程こたえたらしくて、この「回憶漫談」の中で、次のように打ち明けております。ある年、シェイクスピアの『ハムレット』の講義があつて、定期試験がありました。逍遙は、こう書いています。

シェイクスピアの「ハムレット」の試験に王妃ガートルードのキャラクターの解剖を命ぜられて、初めての際には其意味が解りかね、「性格を評せよ」といふのだからと、主として道義評をして、わるい点を付けられた。それに懲りて、図書館を漁り、はじめて西洋小説の評論を読み出した。

勉強のし直しの体験です。ガートルードのキャラクターの解剖、ここでは、「キャラクター」とカタカナになっておりますけれども、当然、外国人の先生の授業ですから、試験問題も英語であつたはずですが。その英語の試験の中に“character of Queen Gertrude”という一節があつたのです。ハムレットの父の王が亡くなつて、そして、その弟とお母さんは再婚します。ところが、ハムレットは、父をその弟（叔父）がきつと殺したに違いないと疑つてしまつて、そこから事件が起きるわけですけれども、その時の母の王妃ガートルードのキャラクターを解剖しなさい、分析しなさい、という問題だつたわけです。

今だつたらそんなに難しくない試験問題が、何故よくわからなかつたのでしょうか。逍遙は、『性格を評せよ』といふのだからと、主として道義評をして」と言います。「道義」というのは、良い・悪いという判断が付き物です。この人はよい、悪い、この人がやつたことは良いことだ、悪いことだ、というように分析していくやり方です。夏目漱石の『こゝろ』を読んで、「先

生」はKを裏切つて自殺させた、「先生」は殺人罪で悪いやつだと、そんなことを書いたら、困るでしょう。それと同じで、王妃ガートルードがどういうシチュエーションでどう考え行動し、ハムレットとの関係で、どういふふうに苦しんで、でも国を支えるためには、再婚をせざるを得ないというふうな、揺れ動くその時のガートルードの気持を、分析しなくてはいけないのです。そうした揺れにこそ、その人の性格、キャラクターが示されるのですけれども、その意味が逍遙にわからなかったというのは、やはり時代性の問題があつたと考えていただきたいのです。

その時代性を示す資料として、わたくしがよく使うのが、J・C・ヘップバーンの作った『和英語林集成』という辞書です。厚い本ですが、複製も出ています。扉の表記を見ると、「米國平文先生著」とあります。J・C・ヘップバーンを、こういうふうに称しています。すぐにピンと来た人もあつたと思いますが、実は、皆さんも知っているローマ字のヘボン式というのは、ヘップバーンがこの辞書で使ったローマ字の表記の仕方です。それが今でも使われているのです。『和英・英和語林集成』となっており、和英の方が全体の四分の三で、巻末に簡単な英和の部分が付いております。ですから、普通は『和英語林集成』と言っております。ヘップバーンはアメリカの宣教師で、そして後に明治学院、現在の明治学院大学を創立しました。そのゆかりもあつて、キリスト教を広めるためにはまず文化事業をやりたいということで、この『和英語林集成』を編纂しました。

日本人のアシスタントとして、岸田吟香というジャーナリスト・新聞記者を呼んで来ました。岸田吟香というのは、明治の新聞記者ですけれども、元々は銀座の葉屋さんで、しかし新時代にジャーナリストになって、そういう仕事を手伝つたのです。ちなみに岸田吟香の息子が、画家の岸田劉生です。岸田劉生のお父さんが手伝つて、明治維新の前の年に初版が出て、それから二版、三版と出ました。比べてみると表記が少しずつ変わったり、意味の説

明が違つて来るのです。

「浮雲」という漢字がありますが、普通の雲としての「浮雲」（うきぐも）ということではなく、別の読み方が出来るのです。じつは、「あぶない」と読みます。ですから、この辞書で「あぶない」というところを見ると、「危」ではなく「浮雲」の二文字が当てられているのです。二葉亭四迷の小説『浮雲』単行本が展示に出ておりましたけれども、実は刊行された明治の二十年頃の人は、あの『浮雲』という字を見ると、どんなに危ない話なのだろうかと思うはずなのです。実際あの話は危ない話で、主人公はふらふらし、好きだった女の子にも振られて、神経質になり、次第に気が狂つて行くのです。この辞書は、明治の初めの頃の言葉を分析するには、非常に便利な資料なのです。

逍遙が文学革新を始めた頃出たのが、明治十八年の第三版、現在では小型のリプリント版が講談社の学術文庫に入っております。そのあるページを資料に出しました。これは英和の部分の「character」のところ。実は、『和英語林集成』では、第三版の見出し語に「性格」というのは出て来ません。「性質」という見出し語は、あります。人間をきちっと観察していく、芸術作品として分析していく時には、「性格」という言葉は普通に使われます。でも、この辞書には載っていないのです。『和英語林集成』の見出し語は四、五万です。四、五万というのは、普通の国語辞典と同じ位の数です。それでも載っていません。念のために、英和の「character」の説明を見てみると、次のようにあります。

Character n. *Moji, ji, shirushi; hyoban, umare-tsuki, tachi, hinko*
先ず一番初めは、「文字、字、印」という意味です。次がわたくしたちの知っている「キャラクター」です。「評判、生まれつき、質、品行」。さらに、用例として“character of place”が「ところから」、「a man of bad character」は、「品行の悪い人」となっています。となると、イメージとしてキャラク

ターは、悪い方にウエイトが置かれているような感じに読めます。「質」とか「品行」というのは、今ではあまりいい意味につながりません。「品行のいい人」とはあまり言わないで、「品行の悪い人」とか、「質が悪い」と言ったりするのです。こうなると、やはりキヤラクターという言葉自体のニュアンスが、日本人には、特に明治十年代後半の日本人には、よくわからなかったように思います。

坪内逍遙は、優等生ではありません。優等生というのは、岡倉天心とか高田早苗のような人です。そういう人達と比べると後れをとってはいるけれど、逍遙は、追いついて、追い越すんだ、という気持を人一倍持つて、そして努力をした人です。こういうふうなイメージを皆さんに持つていただきたいというのが、先ず伝えたいことの一つです。必ずしも逍遙は、最初からさまざまな分野で活躍した人物ではなくて、やはり今後どうなるかわからない人で、それを努力で乗り越えていったのだと、考えてほしいのです。

しかし、勉強しようとしても、必ずしも参考書が豊富にあるわけではありません。そこで逍遙が考えたのは、図書館にある本を調べて、それを読破することでした。ただし、考えてみてもわかります。明治十年代の東京大学でも、どのくらい参考書が手に入るでしょうか。引用した「回憶漫談」の最後の数行を見ていただくとわかりますが、まず「単行本の文学論や美術論は英書では皆無」とあります。それからレトリック、これは昔は良くはやりました。「修辞学」ですね。当時、アレクサンドル・ペインという人のものがあった。東京大学の先生も翻訳しましたけれど、せいぜいそんなものだけです。逍遙は、「性格解剖法の参考としては、主として近著の外国雑誌の文学評論の部を、或いは英文学史類を手当り放題に抜き読みして、解つた限りを抄訳したり何かした」と続けます。そういうもので何とか勉強するより仕方がなかった。もちろん、その時には、英語の百科事典も役に立ちます。逍遙が勉強したのは『エンサイクロペディア・ブリタニカ』で、その例えば「ノベ

ル」「ロマンス」の項を良く読んで、自分の文学論を作つて行つたのです。

3 二葉亭四迷との運命的な出会い

ご存じのように、展示にも出ておりました『小説神髓』が、そうした文学革新の最初の成果です。『小説神髓』を出す前に、雑誌にそのもとなるものを発表して、そして全体をまとめて行きました。書きながら少しずつ考へて行つた、と言つてよいと思います。「後に『小説神髓』としてでつち上げた材料の大概は此間の摺撫で、それをともかくも組織立てはしたものの、出所が全く別々のものだから、後に二葉亭に其根柢を叩かれた時に、『何も無い』と答えないわけにいかなくなつたほどに、それは薄弱な基礎の上に築かれた小説論であつた」というふうに謙遜しておりますけれども、もちろん逍遙の『小説神髓』は近代文学の形成にとつて、非常に大事な仕事であることは言うまでもありません。

『小説神髓』は、日本近代文学館から出た複製があり本の様子がわかりませんが、最初は全九冊で刊行されました。展示に出ているのは、この九冊本を上下巻として、あとで出版社が製本して、発売したものです。九冊本では、第一冊の最後のページは、文章の途中で切れています。翌月二冊目が来ると、表紙をめくり、第一冊の最後のページとくつつけると文章が続くのです。続きがすぐ出ればいいのですが、なかなか出ませんでした。三冊目までは比較的うまくいったのですが、それから数ヶ月出ないという有様です。最後まで何とか仕上がつて、本屋さんには二冊本の形に製本して、発売しました。初期の逍遙の出版物は、だいたいこんな形で出版されました。小説『当世書生氣質』も同じです。

『小説神髓』の大事なことは、言うまでもなく、日本の近代文学を支えていく一つの理念を確立したことです。今までは何でもいい、どう書いたつていいし、例えば伝説でもいいし、非現実的な事件が起きてても、何でもよかつ

たわけですね。馬琴の『八犬伝』の、八つの玉を持つている八犬士の波瀾万丈の活躍は、物語ですので、現実にあることではありません。あくまでも、一種のつくられた、想像の物語なのです。

ところが、それではいけないということを、『小説神髓』は高らかに主張したわけです。最初の所に「緒言」、序文がありますが、そこに、まず「盛んなるかな我国に物語類の行はるゝや」というふうには、小説が盛んになって来たという認識が語られます。これは展示でわかりやすく示された近代文学史と関連します。まず最初に、昔ながらの幕末に活躍した物書きの人が書いた戯作があります。作品背景を新しい牛鍋屋に持つていったら、仮名垣魯文の『安愚楽鍋』になります。それから、幕末から高座で話されていた三遊亭円朝の『牡丹燈籠』は、明治に開発された速記をもとに本になります。また、翻訳小説、当時流行った自由民権運動を支えるための政治小説と言われる物語も生れた。そういういろいろなものがあつて、文学が盛んになって来るのだけれども、それを考え直してみると、今まであつた物語・小説と言われているものは、必ずしも十分ではない。そうではなくて、人間、だったらこういうふうな時にはこういうふうな考え、こういうふうな行動するだろうというふうには、ちゃんとわかるような書き方が必要だ。これを坪内逍遙は、『小説神髓』の中で「小説の主脳は人情なり」と言つたのです。「人情」とは、義理人情というよりも人間の心理、人間の心の姿ということ。出来ればそれを心理学者のように描かないといけない、と提唱しましたが、これは逍遙にとっては一番苦しいわけです。大好きだった『八犬伝』を否定することですから。逍遙が一番苦しいのは、今までの自分を全部、これでは駄目だと考えて、これではなくては新しい時代はいけないのだという形で主張する、その生みの苦しみを、逍遙が一人で背負つたのです。

二葉亭四迷（*本名長谷川辰之助）のような人は、後から来たので、五歳年が違ふんですが、そういう生みの苦しみをしなすみません。お手本があ

るわけですので、逍遙先生の理論というものをうまく吸収しながら、その不足を補つてやつていけばいい、というわけです。逍遙の場合は、明治維新の年まで、約八年あります。その時期に身につけたもの、これを取り払うためには、生みの苦しみが必要、だつたということを御理解いただけるとうれしく思います。

さて、『小説神髓』を書き、そして小説を書いていくわけですが、その実作を書いていくその途中で、ある一つの重要な出来事が起きました。二葉亭四迷との出会いです。『新潮日本文学アルバム』に写真が載つており、今度の展示にも現物が来ておりますが、逍遙の日記があります。明治十九年（一八八六）一月二十五日のところに、二葉亭が訪ねて来た最初の記述が見えます。この日記は大正になってから、坪内逍遙が自分の付けていた日記の中から大事なところをダイジェストして、「幾むかし」という題名でまとめたものです。「此日長谷川辰之助来る。大に美術を論ず」とあります。明治十九年一月二十五日、これは非常に大事な日付です。近代文学の流れの中で、時代が大きく変わる、そういう日付がいくつもあります。泉鏡花が尾崎紅葉を初めて訪ねた日、島崎藤村の『破戒』が本になった日、漱石の亡くなった日、芥川龍之介が自殺した日、まだまだありますが、近代の文学の流れにとつて大事な時が、この百何十年の間にいくつもあるわけです。

わたくしは、長谷川辰之助、後の二葉亭四迷が逍遙を初めて訪ねた明治十九年一月二十五日を、中でも特別に大事にしています。昔、大学で教え始めた頃、坪内逍遙が東京専門学校から本郷の真砂町の家まで戻つてくると、そこに長谷川辰之助が待つていて、そういう設定をしてささやかな物語を書いて、教室で紹介したこともあります。「幾むかし」によると、前の日が日曜日で、仲間の饗庭篁村とか関根正直（*国文学者）とか斎藤緑雨（*小説家。諷刺が得意）とかがやつて来て、おしゃべりをしたり、王子に遊びに行つたり、王子の料亭扇屋で飲んだりしました。その翌日は、東京専門学校

で教えて、帰りに大曲のところにあつた同人社という英語の塾でも教えませす。根津の遊郭の女性（*のちのセン夫人）と結婚したために、どうしてもお金が必要なのでした。逍遙も、必死です。そのような月曜日、本郷真砂町の自宅に帰つて来ると、長谷川辰之助が来ていたのです。実はこの一月二十五日というのは、長谷川辰之助が学んでいた東京外国語学校に退学届けを出した一週間後なのです。外国語学校が商業学校（現在の一橋大学）に合併になってしまふことに、反対の気持ちもありました。つまり、これから文学一本でやろうと決心した一週間後なのです。そして、『小説神髓』を持参し先輩の逍遙を訪ねて、いろいろと尋ねたのです。

実は、明治十九年一月二十五日の時点では、『小説神髓』は九冊本の内、最初の三冊までしか出ていませんでした。ですから、『小説神髓』を全部読んだのではなくて、その途中まで読んでいたのです。これに付箋をたくさん貼つてきて、これはどういうことですか、これについてもっと詳しく説明してください、というふうに、質問したのです。幸い刊行されていた三冊を見てみますと、一番大事な「小説の主眼は人情なり」という一節がある「小説の主眼」の部分、『小説神髓』の一番大事なところは入っていました。

長谷川辰之助は、東京外国語学校でロシア語を勉強し、ロシア文学に目覚めていました。ロシア文学を勉強して、そこから文学のあり方を考えていたわけですから、逍遙と勉強の根本が違つていたわけです。先ほどの「回憶漫談」の一節に、二葉亭から、先生の文学論の立脚点とは聞かれて困つた、とありました。ところが二葉亭は、ロシア文学、さらにはベリンスキー（*ドストエフスキーの才能を発見したロシアの批評家）という評論家の文学論という立脚点があつたのです。辛いところですが、きちんと逍遙はそれを受け止めて、二葉亭が小説を書きたいというと、いろいろとアドバイスをしました。そして、『浮雲』を出す時には、表紙に「坪内雄蔵著」というふうに記し、名義を貸して、本を出してあげています。

二葉亭はその後、『浮雲』を中絶させ、小説から遠ざかりますが、その後の長い沈黙の後、朝日新聞に入り再び小説を書き出しました。しかし、行きかけたロシアに特派員として渡るので病気になる、帰国の途中に亡くなります。実は今年、歿後百年なのです。最後にロシアから船旅で帰つて来るのですが、インド洋上で亡くなります。遺言状を残しますが、その宛先は坪内逍遙で、亡くなつたら、家内や息子を頼む、と書いて託しています。生涯二葉亭をサポートしたのが、先輩の逍遙でもあつたのです。

4 文学科の創設と『早稻田文学』の創刊

あまりにも二葉亭の『浮雲』は、近代小説として立派な仕事になりましたので、逍遙は明治二十二年（一八八九）一月に『細君』という小説を発表した後、小説を書くのは苦しいと、やめてしまいます。そして、演劇の方に転換するのです。その後、どういうことを東京専門学校でやっていたのかは、年譜を見るとわかります。明治二十三年（一八九〇）に、東京専門学校に文学科を創設します。そのとき、わずか三十歳ですね。ということは、東京専門学校で教えた始めた時は二十五、六歳です。大隈重信が東京専門学校を創設したのは明治十五年（一八八二）ですが、作つても先生をどこから集めて来るかという、当時の学問の府である東京大学からしかないわけです。東京大学を出たばかりの若い優秀な人に目を付けて、その卒業生をさつと起用したのが、大隈重信です。小野梓（*憲法学者）とか高田早苗も呼ばれました。

高田早苗は文学から政治・経済の方へ行きます。小野梓は法律をやりました。だから、教え始めた時、東京専門学校の先生方は、皆二十歳代なのです。そういうエネルギーというものが、東京専門学校を支えている。明治という時代の、特徴です。実は文学の世界も、若い人が支えていたのです。文学界では、華々しく尾崎紅葉が、活躍します。尾崎紅葉と幸田露伴は同い年

です。ちよつと遅れて仕事を始めた正岡子規も、同い年です。実は、夏目漱石も同い年です。逍遙は年上ですけれども、尾崎紅葉、幸田露伴、正岡子規、夏目漱石は同い年生まれです。ただ、小説を書き始めるのが遅れるので、漱石がずっと後のように見えますけれども、実は同い年なのです。つまり、日本の近代文学は、若い人が作り出した文学です。

さて、逍遙もまだ若いのですが、当然、東京専門学校でさらに自分の弟子、学生を育てないといけない。文学科を作ればそれが出来るのではないかと考えたのです。今までは、文学科は独立していませんから、逍遙は授業でいろんな科目を担当しました。歴史も教えました。英文作品の講読も、もちろんしました。でも、純粹に文学を教えらるるような文学科が出来ればというわけで、明治二十三年に文学科が出来ました。ただし、この時の文学科は、今のようになくさん学科があるわけではありません。極端に言うと、それは今で言うと、英文科だと思つて下さつてかまいません。明治時代の早稲田の文学部というのは、英文学科なのです。つまり、英語を中心として考える学部なのです。国文科が出来たのは、大正になつてからです。そして、文学科の中には、文学だけでなく、哲学も歴史も含まれています。早稲田の文学部の、哲・文・史、という伝統は、ここから生まれます。

明治二十四年（一八九一）に、逍遙はいよいよ『早稲田文學』を創刊します。文学科をつくつた翌年です。もちろん、東京専門学校には、古くから雑誌はありました。一番代表的なのは、展示にも出ている『中央學術雑誌』（*明治十八年三月創刊）です。これは、早稲田の教員、卒業生の集まつた同攻会という組織が刊行していた雑誌です。それは、法律、政治・経済、文学など、多方面にわたっています。そこで、文学だけの雑誌を作ろうと考えたのが、『早稲田文學』なのです。創刊号の発行の趣旨を見ましましょう。明治二十四年十月の創刊号の、最初のところに出ている『早稲田文學』発行の「主意」の一節です。

方今新聞紙雑誌の類百を以て数ふべししかるに明治文学全体に關したる専門の文学雑誌は未だ一つだにあるを見ず

つまり、純粹の文学だけの雑誌というのは当時なかつたのです。確かに、『中央學術雑誌』が東京専門学校にあります。それから東京大学には『東洋学芸雑誌』が同じように出ております。でもそれは、文学雑誌ではないのです。『早稲田文學』が明治二十四年に出ると、今度はそれをまねして、四年後に東京大学で『帝国文学』という雑誌を出します。ですから、文学關係の雑誌で学校単位に出たものの一番最初が、この『早稲田文學』になります。『早稲田文學』を出すということで、「其名は『エチンバラ批評』『ウエストミンスター批評』などの例に倣へるなり」、つまり、場所の名前を借りるというのです。「早稲田」は、地名というふうに考えられます。「主意」は次のように続きます。

『早稲田文學』は我文学をして円満ならしむべき第一の方便は和漢洋三文学の調和にあるべきを信ずるが故に東西古今を問はず文学の精華を選抜して釈義評註し三文学参照の便に供す

この「和漢洋三文学の調和」ということを、逍遙は一番考えています。ですから、日本の文学、次に中国文学（漢文学）、それからヨーロッパ文学です。これをどうやって、調和させるかということを考える、これが逍遙の頭の中にあることです。だから必ずしも、和を全部否定したわけでもありません。漢文も必要だ。でも、やはり横文字も必要だ。大事なのはそれをどう組み立てるのか、どう調和させるのか、ということになります。ですから、現在では、外国文学と日本文学のシステムを比べていくような、「比較文学」という学問もあります。実は、「比較文学」を日本で最初に取り入れ、講義したのが、坪内逍遙です。東京専門学校の時に、授業をやっています。当時「比較文学」とは言いません。比べて照らすとして、「比照文学」と言っていました。学生が筆記したノートがあつて、それが今活字になつて紹介さ

れておりますけれども。本格的な「比較文学」の授業をやっているのですね。ですから、「和漢洋」これを全部見渡した、ある意味では「世界文学」という世界が『早稲田文学』の考えることなのだ、と思います。この趣旨は、今でも変わっていません。今でも『早稲田文学』を支えているのは、「和漢洋」の調和、日本文学だけではない、横文字だけでもない、中国文学も大事である、この精神です。「世界文学」ということを考えて行く早稲田の伝統の最初の宣言が、ここに出ています。

誌面には様々なことが出て来ますが、一番最初は、どちらかという講義形式の記事です。創刊号のあるページの見開きを、そのままコピーしてみました。有名な坪内逍遙の「シエイクスピヤ脚本評註」、シエイクスピアの『マクベス』の註釈を、逍遙が創刊号からはじめたときはしがきの左ページと、その前のページの見開き二ページです。右側は「巢林子評釈」ですから、近松門左衛門の作品の評釈です。これは別の人がやっています。これが六ページまでで、「シエイクスピヤ脚本評註」は、また一ページから始まります。実は、第一次の『早稲田文学』を見てみると、どうしてこんな風なページになっているのだらうと思います。六ページの最後のところは、文章の途中で終わっています。この続きは来月号で、ということですね。

事実例えば、わたくしの持つております「マクベス評註」の合本では、一ページからずっと最後まで続いています。『早稲田文学』の毎号のその部分だけを切り取って、自分で製本したか、ある連載がまとまったときに、本屋さんで提供して出したかのどちらかでしょう。こうしたかたちが、最初の『早稲田文学』のありかたなのです。こういう作業を積み重ねて、東京専門学校で教えている人たちの仕事、活字になって広がって行きます。後に東京専門学校は、講義録を作って、今で言う通信教育をしました。早稲田の講義を出版して、地方でもそれを読むことが出来るようにしたのです。この精神は今でも、もちろん続いております。東京では、早稲田大学は、いわゆ

る社会人教育、エクステンションと言っておりますけれども、社会人向けの講座を今でも続けています。

ただ、『早稲田文学』はこういう出発の中から、様々な出来事を起こしました。創刊号に載った逍遙の「マクベス評釈」のはしがき、「緒言」に対して、実は森鷗外が反論を書きました。そして行われたのが、有名な「没理想論争」という論争です。資料が展示にも出ておりましたが、森鷗外が『早稲田文学』よりも前に、自分の仲間と文学雑誌をやっておりました。大出が出版している雑誌ではありません。その雑誌が『しがらみ草紙』です。『しがらみ草紙』の二十七号（明治二十四年十二月）で、鷗外が早速創刊号の逍遙の言葉にかみついて、「早稲田文学の没理想」というタイトルの文章を書いて、ここからこの二つの雑誌で論争が始まります。

実際は、二人が議論をしても、やはりお互いの主張を繰り返すだけで、必ずしも新しいものが出て来るわけではありません。しかし、論争することによって、自分たちの基盤というものを明らかにすることはできます。ですから逍遙が、論争することでシエイクスピアをより深く読むことが出来るようになります。鷗外の方も、逍遙とはまた違った立脚点で文学活動を行って行く。そういうところが、よくわかるようになって来ます。

実は、先ほど二葉亭は逍遙に対して、先生の立脚点がありませんか、と言ったと紹介しましたが、逍遙が一番弱いのはそこです。つまり、確かな立脚点が必要も無く、自分の体験で文学を味わい、そして文学を作ってきた。そうした個人的な体験を重視するために、立脚点のはっきりした人にとっては、攻撃の対象としてくみやすいのです。鷗外の立脚点は、ドイツのハルトマンという人の美学でした。早稲田の図書館にも、『美の哲学』というドイツ語の本があります。わたくしは東京大学図書館に所蔵されている「森鷗外文庫」で、鷗外の持つている同じ本を調べたことがあります。出版社が違いますが、中身は同じでした。正岡子規の蔵書が今、法政大

学の図書館の中に入っておりますが、子規も同じ本を持っていました。子規は叔父さんから、もらっています。子規はドイツ語はあまり読めませんが、読んだ形跡はないのですけれども。叔父さんが、子規にプレゼントしたのが、当時の流行っていたこの理論書なのです。現在では、ロラン・バルト、ミシェル・フーコーとか、あるいはデリダ、サイードなどの名前を振り回す人が時折いますが、当時はハルトマンだったわけです。

逍遙の方はたじたじですけれども、でも逍遙の言っていることも確かです。シェイクスピアの作品は、いろいろな人がいろいろな解釈をしているということは、シェイクスピアが大きいからだ、と言うのです。逍遙の言い方によると、「底知らずの湖」なのです。シェイクスピアの世界というものは、あまりにも大きすぎて、いろんな人の理解が様々だが、大きいというところがシェイクスピアの偉大さだというのは、その通りですね。

逍遙も「緒言」の中に書いていますが、『ハムレット』などは非常に解釈が難しい作品なのです。ハムレットとは、どういう人でしょうか。どうしてあんなふうになったのでしょうか。ハムレットが見た幽霊というのは、あれはハムレットが見た幻影かもしれないわけです。そうすると作品の扱いが難しくなってきます。まだ『ベニスの商人』とか『ロミオとジュリエット』の方が、ずっとシンプルですからわかりやすいですね。『ハムレット』が一番難しいというのは、その意味です。

逍遙の発言から十年ほどたって、夏目漱石が英文学の研究で『ハムレット』にぶつかりました。漱石は、ハムレットの性格というものは、実は解釈出来ないのだ、という立場をとりました。ノートの中に、「ハムレットの性格がわからないというところが、ハムレットの性格である」と書き記します。本当に、その通りです。それを逍遙は、十年前に一応『ハムレット』を書いたシェイクスピアの世界というのは「底知らずの湖」で、大きいから様々な理解が出来るかと語ったのです。『ハムレット』の大きさを、そういう

ふうに語っているということも、いかにも逍遙らしいところです。逍遙の説明は、必ずしも上手ではありません。たとえで説明しても、そのたとえが厳密さを欠いていく場合があります。『小説神髓』でも同じです。でも、そういうところに逍遙の一種の人柄というか、おもしろさがあります。逍遙は、理論化はあまりしません。鷗外はそれを、理論化します。そして、論理的に説明します。いいところは両方にあるわけです。それぞれの特徴が、逍遙と鷗外の論争の中から、浮かび上がってきます。

さて、『早稲田文學』を刊行してから、東京専門学校では様々な教授陣が、授業をしました。『早稲田文學』の創刊号に、当時の文学科、つまり早稲田の文学部のカリキュラムが載っています。先生方の名前の一覧表まで出ていて、これを見ると坪内逍遙のほかに、例えば饗庭篁村のような小説家もいます。一番大事なのは、講師氏名のうちの五番目に出ている大西祝という人です。若死にしまいました。東京大学で哲学を学んだ人で、東京専門学校、つまり早稲田の哲学科の基礎をつくった人です。非常にすぐれた人で、もう少し長生きしてもらいたかった一人です。大西祝が明治学院で、ある年の夏に講演をしたのを島崎藤村が学生時代に聞いて、すごく感動しています。大西祝の書いたものを見ても、非常に頭のいい人だったことがわかります。

森鷗外も、授業をちよつと持ったこともあります。いろいろな人が授業を持ったことはご存じのとおりです。展示の中にも教員関係の資料があつて、その中に短期間ですが非常勤をやった夏目漱石の若い頃の写真まで出ています。漱石は、東京大学の英文科を出て、大学院に籍を置きながら、英語を東京専門学校で教えたことがあるのです。松山に行く前です。本当に先生方は、みんな若いのです。その若い人が若い人を教えて、教えられた方が次第に独り立ちをして行くのです。

5 伝統を受け継ぐ、優秀な卒業生たちの出現

先ほど申し上げましたように、東京専門学校は作られた時には、ほかから先生方を呼んで来て、具体的に言うところと東京大学の卒業生の若手の優秀な人を呼んで来て、そして、中心を作って行きました。そのうちに、今度は東京専門学校の卒業生が出て来て、つまり生え抜きの優秀な若手が育ってまいります。その中で、非常に文学的なセンスがある人が、何人か出て来ました。例えば哲学の方では、金子筑水という人、金子馬治ですね。それから国文の方では五十嵐力、後に窪田空穂などと一緒になって、早稲田の国文科をつくった人です。それから、民間で活躍するキリスト教の綱島梁川。綱島梁川は東京専門学校で、東京大学をやめて亡くなるまでわずかですが早稲田で教えてくれた小泉八雲、ラフカディオ・ハーンの授業を聞いています。それから、江戸文学を勉強した水谷不倒という人も出て来ます。

文学関係で有名な人の何人かのうち、二人を今日紹介します。先ず、後藤宙外です。後藤宙外は小説や評論も書きましたけれども、後には春陽堂の『新小説』という雑誌の編集長をつとめ、文壇を支えました。しばらくしてから、ふるさとの秋田に引っ込んでしまいましたので、あまり業績が知られていない人です。この人は明治二十七年（一八九四）の卒業です。ただし、宙外が卒業したときは、もう結構な年です。いろいろな学歴を経て、文学科を卒業しました。そして宙外の立派な卒業論文のある部分が、『早稲田文學』に載るといふ形になります。

早稲田では戦後になって、文芸科を学科として作りしました。今までは英文だとか日文だとか、それから村上春樹みたいに演劇科だとか、そういうところで小説を書くという人は育ってきたわけです。それに対し、文芸科という実際の文芸創作コースの学科を作ったのです。現在でもそれが、文化構想学部 of 文芸・ジャーナリズムコースになっているわけです。卒業制作が、『早稲田文學』に載るといふことも、よくあります。この後藤宙外などは、そう

いう形の最初にあたるようなものでした。卒業論文が『早稲田文學』に載ったときのタイトルは、「美妙、紅葉、露伴の三作家を評す」で、明治二十七年七月号です。実はこのとき、美妙、紅葉、露伴というのは若手の現役作家です。東京専門学校の卒業論文で、現役作家を卒業論文のテーマとして取り上げた最初の実例と言ってもいいかもしれません。今で言うと、さしずめ、村上春樹論、吉本ばなな論、岐阜の出身作家を論じた堀江敏幸論、こうした卒業論文を書いて、それが優秀だからすぐさま『早稲田文學』に載るといふ、そういう感じですね。論じられる人も、まだ二十歳代なのです。また、紅葉、露伴は二十七歳です。

以前、稲垣達郎先生からうかがった話ですが、東京大学で夏目漱石を、漱石の生前に卒論で取り上げたいという人が出たけれど、大学は認めてくれなかったそうです。大正のはじめの頃です。漱石が亡くなったのが大正五年（一九一六）です。東京大学の国文科の卒業論文で漱石を論じたいという学生が出て、先生方は認めようとしません。でも、ある先生の提案で、題名を変えろという条件をつけ、やっとOKになりました。早稲田では、それよりもっと早かったことになりました。

先ほどは、現役作家を論じた例です。これに対して、島村抱月は同じ明治二十七年に宙外と一緒に卒業しましたが、文学ではなくて「美学」、芸術論の卒業論文を書き、百点近い評価を得ました。そして、それが『早稲田文學』に載るわけです。「審美的意識の性質を論ず」という論文です。これが明治二十七年九月号から載ります。実は、明治二十七年九月号というのは、非常に大事な号です。展示にも出ていますが、開かれた部分の右側が赤い紙で、『早稲田文學』が生まれ変わったという宣言の文章が四ページほど載っています。そして本体部分の冒頭に抱月の卒論の最初の部分が載っているのです。

今まではどちらかというと先生方の講義や論文など堅いものが多かったけれども、これからは若い人の文章をどんどん載せていく、と同時に小説や芝

居も載せる、というふうには、本当の意味での文学雑誌に変わって来たので
す。そういう時に、ちょうどまい具合に東京専門学校卒業生に力のある
人が出たわけです。抱月はすぐさま、東京専門学校で教えるようになりま
す。つまり、新卒の卒業生で優秀な人をすぐに東京専門学校は教壇に立たせ
るといふ、そういうシステムを持っていました。そして、抱月は、東京専門
学校がお金を出して何年間か外国留学をさせる第一号になります、明治三十
年代後半のことです。ベルリンとロンドンで、勉強して帰ってきます。その
頃、残念ながら第一次『早稲田文学』は途中で休刊になっていました。周り
がいつも逍遙に向かって、先生、『早稲田文学』を復刊しましょう、と提案
するのですが、逍遙は頑として聞かないで、島村が帰って来たらやる、とそ
う言い続けました。抱月が、明治三十八年（一九〇五）に帰って来ます。そ
れで明治三十九年（一九〇六）一月号から、第二次『早稲田文学』が復刊さ
れるのです。逍遙がトップにいるわけですが、もうその教え子にその実質の
編集を託すことが出来るようになっていました。すでに、東京専門学校は、
名前を早稲田大学に改称していました。それが自然主義の動きとちよつど見
合っていたので、『早稲田文学』が自然主義の牙城と言われるようになった
のです。

抱月の勉強、これはまた大変な勉強です。美学の論文ですから。これだけ
のことを卒論で書くためには、いろんな勉強をしなくてははいけません。わた
くしから見ると、おそらく逍遙が『小説神髓』を書くのと同じような質の勉
強を、学生の島村抱月はしたはずで、わたくしの勉強仲間で、関東学院大
学教授の岩佐壮四郎さんが、今このことをたんねんに調べております。抱月
がこの論文を書くためにどういふ参考書を使ったのか。カントも使っていま
す。ただし、英訳です。早稲田の図書館にあるカントの英訳で抱月が見た本
を突き止めて、論文を執筆中です。『小説神髓』の元になったものが、『エン
サイクロペディア・ブリタニカ』、マコーレーの論文、フェノロサの演説し

た『美術新説』というように、いろいろなソースがわかつて来ているので
すけれども、同じように、抱月の勉強したことも、わかってくるようになった
わけです。

今度は抱月が、教え子を育てる時代ですね。抱月の授業を早稲田で聞くと
いう、次の世代が生まれて来て、正宗白鳥、近松（徳田）秋江、広津和郎の
ような人も登場します。広津和郎さんの回想記『年月のあしおと』を見る
と、明治四十年代ですけれども、抱月先生の授業の様子がわかります。もち
ろん、まだ英文学科しかありませんので、英文学や文学論の授業をするので
すけれども、抱月先生はとても忙しい。売れっ子で。芝居もやっている。で
も逍遙先生と意見が違つて仲が悪いらしい、という噂が流れますが、授業は
一応持っています。でも、授業は休講ばかりなのです。今は休講すると補
講しないといけません、昔はそんなことはありません。抱月の講義は、い
つも休講、だから「休講揭示」は出ません。休講が当然なのですから。抱月
先生の授業がある時だけ、今日授業があります、と「出講揭示」が出ます。
広津和郎さんが回想していますけれども、抱月先生の授業というのは、言っ
ていることはポソポソ言つて、なんだかわからない、しかし苦しそうな顔を
して自分の思いを教壇で言う、あれがたまらないと言つたのです。その姿に接
しただけで、本当に抱月先生の授業に出た甲斐がある、と言つたのです。

逍遙の場合も、同じでした。展示のところはビデオが流れております。音
声がないのですが、シェイクスピアの講義ですね。大隈講堂での講義、それ
を見ているだけでも、逍遙という人間の感じがわかります。ジェスチャーを
交えて、講義します。逍遙の一つの表現のシステムです。相手に何かを伝え
るときの、一つの身振りだとか手振りとか、あるいは表情とかを、逍遙は大
事にしました。それは、絶対活字ではわからないものです。そういう人間の
な何かを次の世代に伝えて行く。そして次の世代がまた伝えて行く。そうい
う形で早稲田の文学の伝統というものが、伝わって行つて行つて行つてい

ます。

逍遙の仕事には、矛盾もあるかもしれませんが、それから至らないところもあるかもしれません。それから理論的にちよつと弱いところもあるかもしれない。でも、それを補う人間的なふくらみとか、あるいは文学勉強の肌合いというか、そうしたものはずっと早稲田の伝統としてあるのではなからうか、と考えております。

『早稲田文學』の初期の話しか出来ませんでした。逍遙のそういう若いときの仕事の中から、逍遙の人間性のようなものの一端でもわかっていたければ、うれしく思います。そして、『早稲田文學』がその反映として、本来に総合的なふくらみがあつて、そしてどんな人にも門戸を開いて行く、川上未映子さんのように早稲田と何のつながりもない人が、『早稲田文學』でデビューするという、そういう関係が今もあります。早稲田というのは、広く「世界文学」を目指しているということ、これを皆さんに知っていただけたら、わたくしの役目が果たされたのでは、と思っております。どうも有難ございました。

(なかじま くにひこ 早稲田大学文学学術院教授)

・本稿は二〇〇九年(平成二十一年)二月二十二日に行われた、美濃加茂市民ミュージアム主催ミュージアムフォーラム「逍遙と『早稲田文學』」が目指したものの講演に手を入れたものです。*印で、若干の注を付しました。



(写真：早稲田大学文学学術院教授 中島国彦氏)

大矢峻嶺 はがき、封書について

菊地 由花

平成十九年二月三日から三月十八日、当館では加茂郡伊深村（現 美濃加茂市伊深町）出身で、大正から昭和の京都画壇に生きた日本画家・大矢峻嶺（おおや しゅんれい／一八九二～一九六七年／本名 貫一）を紹介する企画展として、「花をみる、鳥を描く 大矢峻嶺展」を開催した。この展覧会に向けた調査と、その後の資料寄贈などにより、峻嶺に関わる多数のはがきや封書を当館に収蔵した。そこで今回はこれらを紹介したい。この資料は全て、京都画壇の中心的な存在であった竹内栖鳳の内弟子として、そして竹杖会の一員として制作発表を続けた峻嶺の足跡と交友関係を知る手がかりとなるものである。宛名や峻嶺自身の記名から、ここで紹介する手紙類は「峻嶺」という雅号を授かった後のものである。

一 大矢峻嶺 山崎徳三、千三宛てはがき、封書 (表1)

当館で所蔵する山崎徳三、千三宛ての書簡類は昭和四年から十七年にかけて書かれたものである。峻嶺直筆のはがきが三十七通、封書が二十六通ある。その他、差出人が「大矢峻嶺宅」「大矢峻嶺代」「大矢家」「大矢峻嶺とし子」と書かれたものがある。峻嶺と妻・とし子の連名による封筒の筆跡(表1-70)から、これらは恐らく峻嶺の妻が代筆したものと考えられる。

山崎徳三は戦中まで笠松の木曾川河畔で材木問屋を営んでいた人物で、當時はかなり裕福であったようである。徳三に並んで時折宛名に登場する山崎千三とは徳三の弟である。徳三と千三の家は、道を挟んで立っていた。山崎徳三の甥にあたる山崎吟之助の子・旭男氏によれば、徳三は峻嶺に絵を習っ

ていたという^一。また、絵の他に徳三は俳句を嗜むこともしており、その名は俳句の一門である美濃派獅子門の中にも含まれている。文化的な関心が非常に高い人物であったことがうかがえる。^二

山崎家と峻嶺の交流は深かったようで、京都に住む峻嶺の長男・晶三の妻である大矢千鶴子氏も、「岐阜の山崎さんには世話になった」という話を耳にしたことがあるという^三。また、徳三の家から少し離れた相生町に吟之助が住んでおり、峻嶺が徳三を訪ねて笠松へやってきた際、別荘のようになっていた吟之助の家に宿泊することが度々あったようである^四。

これらの書簡の内容の大半は、作品についてのやりとりである。画題についての相談、価格の交渉、期日延引の詫びや依頼などである。扇子、画帖などを受け取り、描いて送るという手順であったようで、また時には山崎が仲介して別の人物からの注文を受けていたことも窺える(図1)。その他、帰省や制作に関する近況報告(図2)、仲間や自身が出品する様々な展覧会の案内(図3)なども綴られている。この他、徳三が峻嶺に名産品や食物を贈ったり、互いに来遊を誘い合ったりしている様子が読み取れることから、二人の交流は単なる師弟、パトロンといった関係に終始しないものであったと見える。

このような峻嶺と山崎家との広い交流の跡を象徴する作品が遺されている(参考図版1)。鮎を描いた掛軸の表装には山崎家が営んでいた材木問屋の書付が用いられている。鮎は体の表面のぬめりや透き通る印象まで、清らかに描き留められている。落款の書き方から、一九三〇年代頃の作と思われる^五。これは、徳三が材木問屋を営んでいた頃とも、文通の時期とも一致する。

二 大矢峻嶺宛て はがき、封書 (表2)

峻嶺自身がかつて所持していたもので、峻嶺の甥である大前匡昭氏より寄贈いただいた一〇七通のはがき、封書類である。うち4通は差出人等不明な

ものがあつた。残る一〇三通を表2に示した。

これらの書簡は年代幅も広く、大正から昭和に至るまでのものとなつてい
る。峻嶺は十九歳で岐阜から京都へ日本画を学びに出て三木翠山に師事した
後、竹内栖鳳の内弟子となつてい。翠山からの便りも四通含まれていた
(表2・72、73、74、75)。最も古いものは、大正五年三月十八日の消印が捺さ
れた東原方僊からのがき(表2・64)である。住所は「市内御池通油小路
西入 竹内栖鳳先生内」とあり、峻嶺が栖鳳の元で暮らしていた頃と判る。

差出人には京都画壇、竹内栖鳳周辺の画家の名が並んでいる。伊藤石華、
大村廣陽、小野竹橋、加藤英舟、金嶋桂華、北上聖牛、榊原苔山、佐藤寛山、
吹田草牧、徳田隣斎、豊島停雲、中田晃陽、西村五雲、橋本関雪、濱田観、東
原方僊、星野空外、吉田硯堂らは竹杖会の会員である。この一覧からは、峻嶺
が京都画壇の作家のネットワークの中で確かに活動していたことが窺える。六
この頃の内容には「研究会」という言葉が頻繁に記され、研究会の出欠を
知らせるものが多い。また、研究会や批評会への自分の作品の手配を峻嶺に
依頼するものが複数ある。こうした内容と共に、北上聖牛からのがき(表
2・27)や小野竹橋からのがき(図4)のように、「研究会幹事宛」と書か
れたはがきも含まれていることから、峻嶺がそうした役割も果たしていたこ
とが推測できる。また、提出作品について課題を提案する吹田憲一(吹田草
牧の本名)からのがきなどもある(図5)。

更に山本紅雲や、峻嶺と共に平安桜楓会に所属していた里見米山人は、峻
嶺に連れられて美濃加茂へ来ており、峻嶺とともに寄せ書きを遺している画
家でもある(図6)七。特に山本紅雲との親交は特に長く、古くは大正六年
から昭和三十六年まで文通している。そのうち、大正九年四月二十八日付の
紅雲からのがきは、峻嶺が支那旅行に行く予定と聞き旅先からの便りを是
非送つて欲しいという催促の内容である。峻嶺は大正九年の四月から六月に
かけて竹内栖鳳の中国旅行に同行しており、この旅行のことを指しているの

だろう。(図7)

また、昭和十五年に目黒から届いた東原方僊から大矢家に宛てたはがき
は、目黒雅叙園で制作中の峻嶺が瀧に打たれて精進しているといった風の画
が描かれている。目黒雅叙園で制作した峻嶺の作品は現存するのかどうか、
資料なども不明であるが八、峻嶺の甥・大矢富美男氏は雅叙園で峻嶺の作品
を見た人物から、峻嶺はひとつの小部屋を与えられ、竹の間を描いていたと
いう話を聞いたという九。

画家以外では、詩人の西條八十からの年賀状がある(図8)。更に、八十
の弟・西條隆治からのがきも届いている(図9)。大矢千鶴子氏が峻嶺の
妻・とし子から聞いた話によれば、西條隆治は初め竹内栖鳳の元に美術研究
をしたと言つて東京からやつて来たが断られた。その後隆治は大矢家に
身を寄せ、しばらく居候をしていたという一〇。また、峻嶺の長女・初子氏
によれば、隆治が滞在していたのは嵯峨若宮町の大矢家の二階であつたとい
う一。峻嶺の住所について詳しくは四章で触れるが、大矢家が若宮へ移つ
たのは昭和初期であるため、八十の年賀状は隆治が大矢家にいた頃よりも前
のものということになる。峻嶺と八十がどのような繋がりであつたのかは今
回の調査では判らなかつたが、隆治が大矢家に来るずっと以前から西條八十
と関係があつたことは確かである。峻嶺は隆治に様々に援助していたよう
で、そのことについて八十から大矢家の隆治に宛てて書いた書簡ものこされ
ている一二。

三 大矢峻嶺宛て封書、はがき(画材靴から) (表3)

峻嶺が持ち歩いていた画材を入れた革靴のポケットに、はがきや書簡が
入っていた。この画材靴は岐阜県関市で揮毫した折に置いていったものであ
る。全十一通、未投函の一通をのぞき全て消印が昭和二十四年となつてい
る。宛先の住所が榎岡平祐(表3・7)、土井請夫(表3・8)からの封書

以外は全て「伊深村 渡辺十一吉様方」であることから、昭和二十四年の帰省の時には長く渡辺家に寄宿していたことが窺える。滞在は長期にわたっていたようで、大矢家からのはがきには帰京の催促や京都に届いた手紙に対して返礼を出すよう伝える内容が書かれている。八月十一日付の大矢家からのはがき(表3-11)には、「千三様より御たよりに帰省の節お立ち寄りください度」とあり、恐らく山崎千三のことを指している。更に、この画材鞆の中には山崎徳三からの書簡も含まれていた(図10)。昭和二十四年、戦後になっても峻嶺と山崎家との交流が続いていたことを示している。文中には「正眼寺前々候へむ先生の個展も正眼寺御老師御不在のため延引の御様子従つて御開催日も延引承知仕り候」とある。伊深の民俗学者・佐野一彦が記した『伊深日記』によれば、峻嶺はこの昭和二十四年九月十五日前後に伊深・正眼寺で画会を行っている。徳三からの封書は八月二十六日付けである。画会の予定日を変更して九月十五日前後に至ったことが読み取れる。また、俳句を愛した徳三らしく、最後には「御名句でも出来て居り升と存じます一句はがきにて御披露願上度く侍入候」という言葉が付け加えられている。

この他、加茂郡太田町の中山道旧脇本陣・林魁一からの封書や、峻嶺の叔父で画商の阿部広基からのはがきも含まれていた。また土井請夫からの封書(表3-7)では、三重県の尾鷲でこの年に画会を行ったことなどが読み取れる。

四 大矢峻嶺宛て書簡 大矢家旧蔵 (表4)

平成二十年度、大矢家から峻嶺宛の封書とはがきの寄贈を受けた。先に触れた石川龍三からの封書や正眼寺の老師であり、妙心寺派管長であった梶浦逸外からの封書が3通、年賀状が一通ある。大正十三年三月十五日付の封書(表4-4)の文面からは、梶浦逸外が肖像画を峻嶺に依頼した旨が読み取れる。初子氏によれば、梶浦逸外はしばしば京都の峻嶺の元にも訪れていたという¹³⁾。

『妙法山正眼寺誌』(正眼寺誌編纂委員会、一九五四年)の中扉や雑誌『正眼』(第八号、一九七九年)の表紙に峻嶺の画が使用されていることや、先の章で触れたように昭和二十四年九月には正眼寺で画会を開催するなど、峻嶺と正眼寺との関係も深い。この画会の写真(参考図版2)には、中央に梶浦逸外、その左には峻嶺が写っている。日記に画会の様子を記した佐野一彦の姿もある。

更に、裏千家前家元の千宗興からの年賀状(表4-11、12、13)や二章で触れた西條隆治執筆の原稿(表4-8)も含まれていた。また、表4-9にある斎藤紫山も、峻嶺と共に美濃加茂へやってきて寄せ書きを遺した作家の一人である。

五 おわりに

これらの資料を総括したとき、宛先や差出の住所から、大正末から昭和初期にかけて峻嶺は度々転居していることがわかる。大矢千鶴子氏がとし子から聞いた話では、二人は結婚してしばらくは竹内栖鳳の元で暮らし、長女が誕生した頃には清水阪へと移ったのだという。初子氏によればその後、天龍寺前、八軒町など嵯峨の地域で住まいを転々と変え、最終的に栖鳳の土地であった若宮町に引っ越したのだという。そこは、栖鳳が別荘・霞中庵を建てた隣の土地であった¹⁴⁾。こうした証言と記された住所は一致している。

大正十年三月三十一日	御池通油小路西入	(山本紅雲葉書)	表2-83
大正十一年八月八日	清水阪新道	(金嶋桂華葉書)	表2-21
大正十三年三月十五日	京都市外嵯峨町上八軒	(梶浦逸外封書)	表4-4
大正十三年四月一日	京都市外嵯峨駅裏八軒町	(梶浦逸外封書)	表4-5
大正十四年六月十一日	京都市天龍寺前	(岩野平三郎葉書)	表2-9
大正十五年二月十八日	京都市嵯峨町八軒町	(正眼寺封書)	表4-10

昭和三年十月二十二日 市外嵯峨駅裏 (徳田隣齋葉書) 表2-45
昭和四年七月二日 市外嵯峨駅裏若宮町 (大矢峻嶺封書) 表1-38

まず、栖鳳の元から清水阪へと転居したのは大正十年四月一日から大正十一年八月までの期間、そして清水阪から大正十三年の三月までに嵯峨の上八軒へ移っていることが判る。以降の住所表記は様々であり、若宮に居を構えるまで転居を繰り返したという時期にあつてはいるのだろう。

「若宮町」という言葉が出てくるのは、現時点の資料からみると昭和四年の峻嶺自身の表記が最も古い。以降の住所は全て「嵯峨駅(北) 裏若宮町」となっている。さらに、昭和三年十二月十八日発行の日本美術年鑑一五では峻嶺の住所が「京都市外嵯峨町駅北若宮」とある。このことから、少なくとも昭和三年の年末までには若宮で暮らすようになったと判る。

また峻嶺は岐阜や京都といった直接の深い縁がある限定的な地域だけではなく、福井県や三重県など様々な場所にも滞在し、揮毫や画会を行っていた。今後はこの情報を基として、年譜の情報を詳細にしていこうと、未だに行方わからない展覧会出品作品の発見につながればよいと思う。

最後になりましたが、資料の寄贈や論文執筆に関わる調査にあたり多大なご協力を賜りました大前匡昭氏、大矢千鶴子氏、加納初子氏、花村康秀氏、木本広子氏、山崎旭男氏、大矢富美雄氏、佐野綾目氏、寛真理子氏、笠松町歴史民俗資料館の方々に心からお礼申し上げます。

(きくち ゆか 美濃加茂市民ミュージアム)

註

- 一 山崎旭男氏への聞き取り調査による。
- 二 この辺りの山崎徳三の略歴に関する情報提供は、笠松市歴史民俗博物館による。
- 三 大矢千鶴子氏への聞き取り調査による。
- 四 山崎旭男氏への聞き取り調査による。
- 五 拙稿「大矢峻嶺 制作年代について」落款・印章の調査から、『美濃加茂市民ミュージアム 紀要第6集』(美濃加茂市民ミュージアム、二〇〇七年)
- 六 京都画壇の作家については、『竹杖会々員名簿』(美濃加茂市民ミュージアム蔵)、神崎憲一

『京都に於ける日本画史』(京都精版印刷社、一九二九年)、『日本美術年鑑』(東京朝日新聞発行所、一九二八年)、徳美大容堂「栖鳳画伯と其周辺の人達(三)」(『美之園』第13巻、5号、一九三七年)等を参照した。

七 岐阜へやつてきた峻嶺とその仲間の一行は、宿泊先で御札として寄せ書きを遺している。八 目黒雅叙園六号館に揮毫したことが記録として伝えられている。『目黒雅叙園美術館コレクション』近代日本画名作展 花鳥風月―自然の彩り・四季折々のうつくしき』(岐阜県美術館、二〇〇一年)

九 大矢富美雄氏への聞き取り調査による。

一〇 大矢千鶴子氏への聞き取り調査による。

一一 加納初子氏への聞き取り調査による。

一二 『西條八十全集 第十七巻 随想・雑纂』(国書刊行会、二〇〇七年)所収の「62 西條隆治宛 封書」参照。宛先は「京都市嵯峨若宮 大矢峻嶺様方 西條隆治」となっており、大矢家に暮らしていたこと、峻嶺が隆治を通じて八十に絵を託すことになった経緯などについて記されている。

一三 加納初子氏への聞き取り調査による。

一四 大矢千鶴子氏への聞き取りによる。

一五 『日本美術年鑑』(東京朝日新聞発行所、一九二八年)所収の「現代美術家録」九頁参照。

*略歴の凡例

・この略歴は『岐阜県美術(近代絵画編)』(一九八四年、郷土出版社)所収の平光明彦「大矢峻嶺 略年譜」を基本とし加筆・修正を行った上で「花をみる、鳥を描く 大矢峻嶺展 図録」(二〇〇七年、美濃加茂市民ミュージアム)に掲載した「大矢峻嶺年譜」に加筆・修正を行ったものである。

・今回加筆した情報源は、平成二十年度に大矢家から新たに寄贈を受けた峻嶺のスクラップブックに貼り付けられた新聞記事、展覧会の案内状などを参照した。

*表、翻刻の凡例

・年代については原則として消印日を採用した。但し、消印が判読できない場合には文中の日付で記している。

・消印が判読できないもの、日付印がないもの、文中にも日付記載がないものについては年代不明とした。

・大正と昭和の別は、官製葉書の発行からも判断している。郵政省編集『郵政百年史資料 第二十八巻 郵便切手・はがき図録』(吉川弘文館、一九七一年)、および郵政省郵務局郵便事業史編纂室編集『郵便創業120年の歴史』(ぎょうせい、一九九一年)を参照した。

・表1の「大矢峻嶺 山崎徳三宛はがき、封書」については年代順、はがき、封書の順で記した。その他の表2-4については、差出人のあいいうえお順とし、その中で年代順に並べた。

・これらの表の編集・作成と翻刻は本館学芸員・可児光生と菊地由花で行った。

大矢峻嶺 略歴

西暦	和暦	年齢	事柄
1892	明治 25		12月8日、加茂郡伊深村(現美濃加茂市伊深町)に父継次郎、母き美の長男として生まれる 本名貫一 父は農業を営む
1904	37	12	3月、伊深尋常小学校を卒業 4月、同校高等科へ進む
1905	38	13	6月21日、伊深尋常小学校高等科を中途退学
1911	44	19	画家を志して京都市東山区在住の三木翠山の門に入り、初めて本格的な日本画の教えるを受ける
1913	大正 2	21	師翠山のすすめで竹内栖鳳の門に入る
1916	5	24	師栖鳳から「峻嶺」の雅号を授け、同時に門人で組織する竹杖会会員となる
1917	6	25	大日本産業博覧会に「茄子畑」を出品
1919	8	27	第1回帝展に「木曾路の夏」を出品
1920	9	28	春、小野庚申堂に「鶏」を奉納 4月から10月にかけて、師栖鳳の中国旅行に同行する 第2回帝展に「大悲閣」を出品 10月、岡村年孝と結婚する 年孝の父岡村庄吉は神戸市東区一円庄の庄屋であった
1921	10	29	4月から7月まで栖鳳の中国旅行に再度同行する 第3回帝展に「夏の片山津」を出品
1922	11	30	日仏交換展サロンに「牡丹」を出品
1926	15	34	第7回帝展に「御嶽渓谷」を出品
1927	昭和 2	35	第8回帝展に「室津港」を出品
1928	3	36	第9回帝展に「塩田風景」を出品
1929	4	37	久邇宮家の天井画揮毫を拝命する 「花鳥二題」
1930	5	38	第11回帝展に「天龍寺の朝」を出品
1931	6	39	第2回聖徳太子奉讃美術展に久邇宮家の天井画が展示される
1932	7	40	竹杖会研究会展「桜島風景」優作賞受賞 「鵜飼場の画」を出品 この年、関にて画会を行う
1933	8	41	11月、竹杖会解散宣言をする 「高千穂」を出品
1934	9	42	京都北野天満宮宝前青銅製 狗台石彫刻画(栖鳳揮毫「梅」)の下絵模写をする 第15回帝展に「朝の霧島」を出品 大礼記念京都美術館美術展覧会 第1部に「新京公園」を出品
1935	10	43	京都市展(招待)に「丘の道」を出品
1936	11	44	京都市展に「ライン新緑」を出品 第1回新文展に「雲仙高原の初秋」を出品
1937	12	45	梨宮家献上画揮毫を拝命する 「春秋花鳥二題」梨本宮殿下の前で揮毫する
1938	13	46	第3回京都市展に「金剛山の寺」を出品
1939	14	47	目黒雅叙園6号館に執筆
1940	15	48	水郷湖来小品展覧会(京都 大丸)に「秋村」「栖鳳先生来遊碑」を出品
1941	16	49	第6回新文展に「牧場の朝」を出品 5月19日新義州に到着、緑屋旅館にて画会を開催
1942	17	50	6月、栖鳳揮毫による陸軍省依頼画「宮城を拝して」の織物下絵模写を描く 8月23日、師竹内栖鳳死去する この年、星の宮神社に「富士」を奉納 11月10日-15日、新作画幅展(京都 大丸5階美術部)開催
1943	18	51	3月2日-7日、大矢峻嶺新作展(上野 松坂屋)を開催 6月2日-6日、大矢峻嶺日本画展(名古屋 松坂屋六階画廊)開催
1949	24	57	9月15日、伊深・正眼寺にて画会を開く
1952	27	60	9月1日-10日、竹杖会日本画展(金剛荘美術センター)に出品
1953	28	61	関市小野で画会を開く(小野庚申堂本堂の屋根の改修にあたり、浄財寄進)
1955	30	63	5月、京都天龍寺山内弘源寺本堂の襖を揮毫する 「松」「梅」を担当する
1956	31	64	11月、平安桜楓会の結成 峻嶺も所属していた
1957	32	65	6月6日-11日、個展(新岐阜百貨店3階画廊)を開催 5月3日-8日、個展(名古屋市 中村屋百貨店6階画廊)を開催
1958	33	66	竹杖会展覧会(京都 大丸)に「もくげ」を出品 5月24日-29日、小品展(新岐阜百貨店3階画廊)を開催 10月15日-19日、平安桜楓会第4回展(京都御所 紫宸殿回廊)に出品
1959	34	67	11月6日-10日、平安桜楓会第6回展(京都御所 紫宸殿回廊)に出品
1960	35	68	7月12日-17日、三輪高英、諸藤英世と共に京都画壇日本画三人展(札幌市 丸善3階画廊)に出品 7月19日-25日、竹杖会展(京都 大丸)に「青梅」を出品 11月10日-14日、平安桜楓会第8回展(京都御所 紫宸殿回廊)に出品 11月19日-24日、霜月会日本画展(丸物 五階画廊)に出品 この年、京都新聞の「学芸」欄にカットを描く
1961	36	69	4月13日-17日、平安桜楓会第9回展(京都御所 紫宸殿回廊)に「林泉桂離宮」を出品 10月3日-8日、三輪高英、諸藤英世、函子竹春と共に第2回京都画壇日本画展(札幌市 丸善3階画廊)に出品 11月9日-13日、平安桜楓会第10回展(京都御所 紫宸殿回廊)に出品
1962	37	70	4月11日-15日、平安桜楓会第11回展(京都御所 紫宸殿回廊)に出品 11月7日-11日、平安桜楓会第12回展(京都御所 紫宸殿回廊)に出品
1963	38	71	4月11日-15日、平安桜楓会第13回展(京都御所 紫宸殿回廊)に「遠望」を出品 10月24日-28日、平安桜楓会第14回展(京都御所 紫宸殿回廊)に出品
1965	40	73	4月15日-19日、平安桜楓会第15回展(京都御所 紫宸殿回廊)に「松琴亭=桂離宮」を出品
1967	42		4月1日死去(74歳)

図1

相模野中紙巻多し有難
 あり今も中野の産物三品
 及木船標の事切三品有難
 承知せり有る事早しき
 此道中 古来の先にも取
 此取中 皆物よりし之因

図2

謹啓 貴國馬場の御八中遠方
 あり 此道中 皆物よりし之因
 誠之先にも取中 皆物よりし之因
 一取中 皆物よりし之因
 此道中 皆物よりし之因
 承知せり有る事早しき
 此道中 古来の先にも取
 此取中 皆物よりし之因

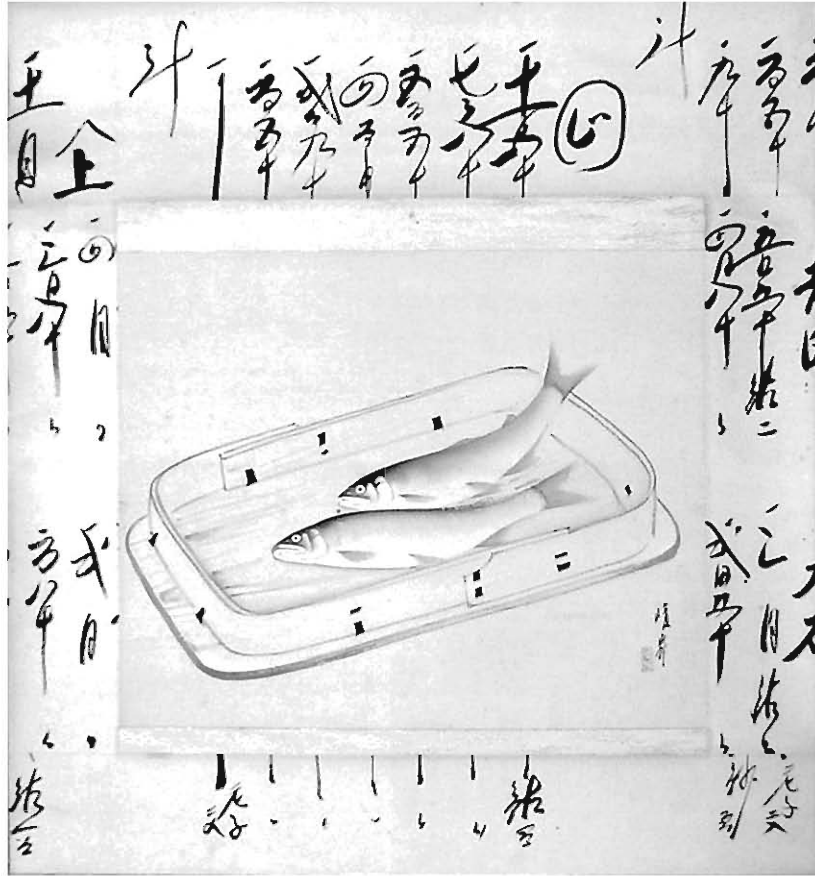
図3

相模野中紙巻多し有難
 あり今も中野の産物三品
 及木船標の事切三品有難
 承知せり有る事早しき
 此道中 古来の先にも取
 此取中 皆物よりし之因
 山崎徳三様

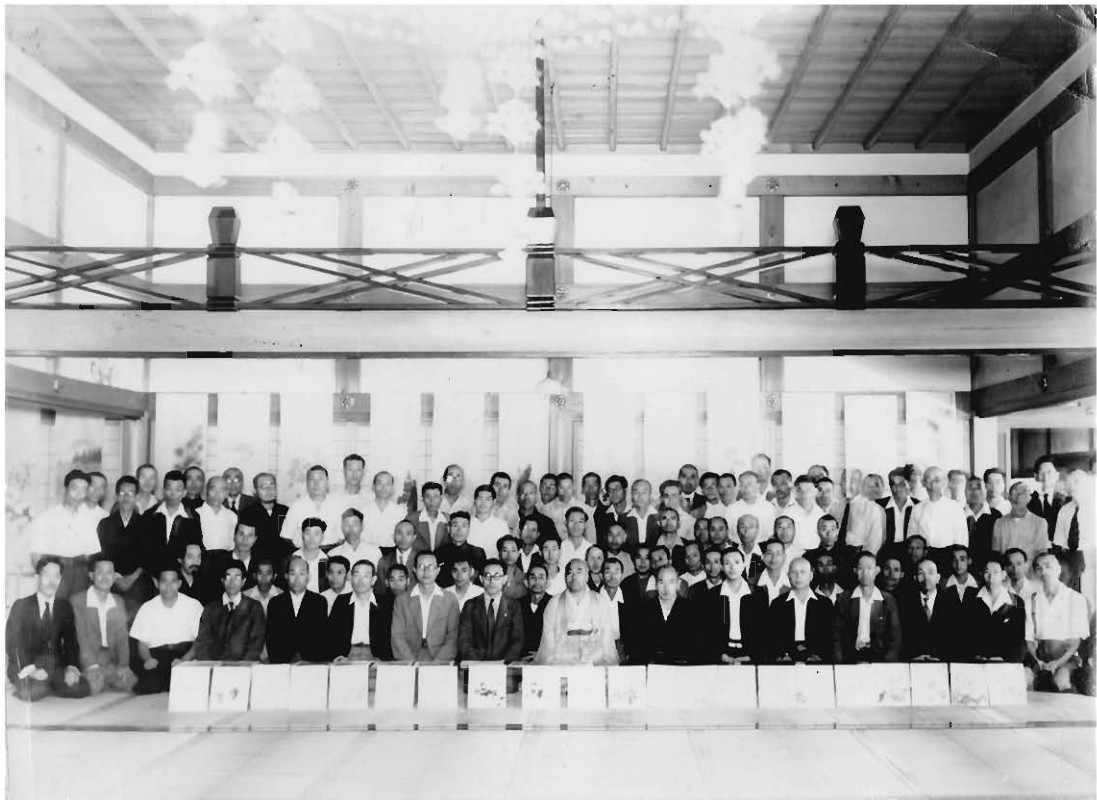
図4

郵便 市内御池二通
 油七路西入
 竹内栖鳳先生方
 研究会幹子様
 市内御池二通
 春月十七日 夜九時 竹内

研究会 御賞状 御評言 御意 御礼 御返
 先月御賞状 御評言 御意 御礼 御返
 ら旅行中とて失礼の致し 御意 御礼 御返
 月廿五日 御賞状 御評言 御意 御礼 御返
 又 御賞状 御評言 御意 御礼 御返
 責任上 御賞状 御評言 御意 御礼 御返
 来上 御賞状 御評言 御意 御礼 御返
 春月 御賞状 御評言 御意 御礼 御返



参考図版1 大矢峻嶺「鮎」 個人蔵



参考図版2 昭和24年 正眼寺画会写真 美濃加茂市民ミュージアム蔵

【図1】表1・32 昭和十年十一月二十六日

はがき（大矢峻嶺から山崎徳三宛て）

拝啓 御手紙いただき有難く

拝見仕り候御申越しの横物二点

及び村瀬様よりの半切二点有難く

承知仕り候なる可く早々にしたため

御送り申可上候 先は不取敢

御礼まで 皆様よろしく 勿々

【図2】表1・46 昭和七年八月二八日

はがき（大矢峻嶺から山崎徳三宛て）

謹啓先般関二て画会の節は御遠方

わざわざ御越し下され何の御風情もなく

誠に失礼仕候会後小瀬鵜飼のある山水

一枚写生致候川辺、八百津、蘇水峽、下呂、

諸所見物致候時には揮毫にをわれ

暑さの折柄非常につかれ申候為帰途

御伺ひも致さず残念ながら失礼致し

昨朝帰宅仕候 定めし御待ち下され候事と誠に

恐縮致し居り候 何卒不悪

御許し願ひ上候 御令弟様へもよろしく

【図3】表1・60 昭和十六年三月二十三日

封書（大矢峻嶺から山崎徳三宛て）

拝復時下春暖の候と

相成り候處尊堂御一同様に八

御障りもなく御壮健の条

奉賀候其後御無沙汰申

居り候處小生去る八日急ぎの仕事にて

帰宅仕り候處何かと用件でき

二十日頃には福井へ行く筈に相成り

をり候處来月早々に阪急百貨店

にて丹丘会にて展覧会致す

事に相成り四点ばかり制作致

さねばならず来月まで出張

延期致し居り候 御申越しの画帖

揮毫の儀承知仕り候 六浦様のも

延引に相成り申訳け之無く候へ共出品

作品揮毫まで一寸御猶豫願ひ上候

敬具

三月二十二日

大矢峻嶺

山崎徳三様

【図4】表2・18 大正九年三月十八日

はがき（小野竹橋から竹杖会幹事宛て）

拝啓 研究会批評員御知らせに預り難有存候

先月及先々月も当番にて御通知に預り乍

ら旅行中とて失礼のみ致し候事なれば今

月は是非にも参上いたし申可き筈の處、

又々明日やむなき事情にて旅に出立いた

す事と相成候まゝ、実に不都合続きにて

責任上申訳無之事に候えども今度も

参上いたしかね候まゝ、不悪御ゆるしに預り度

五月上旬帰京の予定に候まゝ、五月研究会に

は是非出席可致候、

草、

【図5】表2・39 大正七年一月八日

はがき（吹田憲一から大矢峻嶺宛て）

拝啓 先日 吉田君の送別会には生憎不在中にて失礼

いたし候、吉田君はもう御出発なされ候哉

扱て写生会半折課題は小生が出題するのだとは存

ぜざりし為め大変遅れ失礼仕候 若し未だきま

り居らず候はば次のものは如何に候哉

『青木』

尚期日は廿五日午前九時よりなるべし。誠に恐縮

乍ら右御張出願ひ度只管御願申上候

【図6】 表2-37 年代不明五月二日

はがき（里見米山人から大矢峻嶺宛て）

出発に際し送別の

宴を張って頂きそ

の上御多忙中御見

送り頂き御厚情

深く感謝致し居り

ます 台北で三四日休

み廿一日廣東に上

がります

奥様へよろしく

申上げ下さい

【図7】 表2-82 大正九年四月二十八日

はがき（山本紅雲から大矢峻嶺宛て）

其後御無沙汰致しました。

先達ハ長座致しました 幾重にも御詫致します

今度支那行に同行さる様です ね道中感想を

繁く下さい 是非々!! 吉田兄も出品の

用意に没頭してゐます 小生も場所は見付けました

来月早々帰京の豫定でゐますが最早貴兄に会

へないかも知れない何分遠路ゆへ健康でありま

す様御心懸下さい。私よりも祈つてゐますから

それでは御丈夫であつてきてくれんさい

繁く便りを下さい たのみますよね。

奥様に宜しく!!

【図9】 表2-31 大正六年二月十一日

はがき（西条隆治から大矢峻嶺宛て）

度々御手紙頂戴して御返事も差上

げず誠に済みません。

非道い神経衰弱にやられて弱つて

ゐる。

それが為特販塾の機も失なひ先生、

逸三氏始め諸兄に誠に御無沙汰

してゐます。

逸三氏には何れ手紙を差上げ度考へてゐ

ますがどうかよろしう御傳へ置き下さい。

先は右まで

【図10】 表3-11 昭和二十四年八月二十六日

封書（山崎徳三から大矢峻嶺宛て）

拝啓残暑厳しく御座候處先生には益々御清栄御健筆

の趣き拝承し慶賀の至りに不堪候小生不相変健康にて日々勤務

申居り候条乍他事御放慮なし被下度候 前々候へは先生の

個展も正眼寺御老師御不在のため延引の御様子従つて御開催日も

延引承知仕り候就ては其れ迄に御寸暇も出来御余猶も有之候へは

是非御来遊の上久々御高話御聞かせ被下度候 幸に御出掛け被下候

様なれば夫れ以前に一寸御日時等御通知置き被下候へは自宅にて御

待ち申居り候尤も御都合悪しく御来遊難出来候節ハ御販洛の

節にでも御立寄り被下度候 小生も都合出来得る限り参上画会拝

見仕り度き考へに御座候 其の節ハ何分とも宜布く御願申上候べし

乍末事御令弟各位様に宜布く御鳳声被下度候

御名句でも出来て居り升と存じます一句はがきにて御披露願上度く侍入候

表1 大矢峻嶺 山崎徳三宛てはがき、封書

No.	資 料 名	時 代	内 容、その 他	備 考
1	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和4年11月14日	依頼画延引の詫び	
2	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和5年4月2日	滞在の礼	
3	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和5年5月17日	葉書の礼と作品の値段交渉	
4	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和5年5月24日	色紙送付の通知	
5	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和5年7月18日	病気見舞いと作品送付の通知	
6	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和5年8月31日	来遊の誘いについて	
7	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和5年9月口日	近況報告(「天龍寺の朝」制作)	
8	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和5年10月30日	為替受取の礼	
9	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和5年11月26日	言付けの礼と近況報告	
10	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和6年4月6日	病気見舞いと依頼画の承知	
11	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和6年4月30日	作品送付の通知	代筆か
12	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和6年5月5日	送金の礼と藤見の誘いの断り	
13	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和6年8月21日	近況報告(立山への写生旅行)	代筆か
14	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和6年11月15日	作品発送の通知	
15	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和7年4月15日	作品揮毫と延引の詫び	
16	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和7年4月28日	送金の礼と来遊の誘い	
17	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和7年5月10日	色紙受取の通知	
18	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和7年6月1日	早苗会展の案内	
19	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和7年8月20日	関での画会への礼、岐阜見物について	
20	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和7年10月17日	帝展結果の知らせ	
21	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和7年10月20日	来遊の誘いと近況報告	
22	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和7年10月31日	表装についての連絡	
23	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和7年11月19日	依頼画延引の依頼	
24	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三、千三宛て)	昭和7年12月24日	祝儀への返礼	代筆か
25	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和8年1月31日	送金の礼	
26	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和8年3月11日	手紙への返礼と挨拶	
27	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和8年4月口日	作品購入の依頼	
28	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和8年12月26日	祝儀、小画会への礼	代筆か
29	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和10年6月18日	依頼画の描き直しについて	
30	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和10年7月10日	詫びと返送の通知	
31	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和10年11月12日	展覧会の案内	代筆か
32	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和10年11月26日	依頼画への礼	
33	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和11年10月15日	為替の受取の通知と礼	
34	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	年代不明7月23日	近況報告と来遊の誘い	
35	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	年代不明7月31日	手紙への返礼と日程の相談	
36	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	年代不明11月29日	旅先(鳥羽)から帰宅予定の通知	
37	はがき(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	年代不明12月18日	贈答への礼	
38	封書(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和4年7月2日	贈答の礼	
39	封書(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和5年2月27日	作品延引の詫び	
40	封書(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和5年5月28日	代金についての依頼	
41	封書(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和5年6月2日	作品の値段交渉	
42	封書(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和5年11月21日	予定の通知	
43	封書(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和6年2月8日	作品延引の詫び	
44	封書(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和6年11月7日	贈答の礼	
45	封書(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和7年6月24日	滞在の依頼	
46	封書(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和7年7月28日	訪問時不在の詫び	
47	封書(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和7年11月5日	依頼内容の確認	
48	封書(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和11年8月17日	滞在の依頼	
49	封書(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和11年9月7日	滞在の礼	
50	封書(大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和11年11月1日	—	本状欠

No.	資 料 名	時 代	内 容、その 他	備 考
51	封書 (大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和13年5月27日	丸物百景展の案内	
52	封書 (大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和13年7月16日	中元の礼	
53	封書 (大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和13年8月6日	作品送付の報せ	
54	封書 (大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和13年8月10日	揮毫代金等受取の礼	
55	封書 (大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和15年2月13日	作品代金の通知	
56	封書 (大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和15年2月19日	仕事依頼の引受について	
57	封書 (大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和15年3月6日	画帖依頼の件について	
58	封書 (大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和15年11月3日	作品延引の詫び	
59	封書 (大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和16年1月3日	作品購入の礼	
60	封書 (大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和16年3月23日	作品延引の依頼	書状(六浦田次郎から山崎宛)同封
61	封書 (大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和16年7月29日	依頼品到着の報せ	
62	封書 (大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	昭和16年9月25日	仕事依頼の引受について	
63	封書 (大矢峻嶺から山崎徳三宛て)	年代不明6月27日	近況、予定の報告	
64	はがき (大矢峻嶺宅から山崎徳三宛て)	昭和5年3月23日	依頼画延引の詫び	大矢峻嶺代筆 (大矢とし子)
65	はがき (大矢峻嶺宅から山崎徳三宛て)	昭和5年9月26日	贈答の礼と近況報告	大矢峻嶺代筆 (大矢とし子)
66	はがき (大矢峻嶺宅から山崎徳三宛て)	昭和5年9月28日	御守受取の礼	大矢峻嶺代筆 (大矢とし子)
67	はがき (大矢峻嶺宅から山崎徳三宛て)	昭和6年9月23日	出品に向けての近況報告	大矢峻嶺代筆 (大矢とし子)
68	はがき (大矢峻嶺宅から山崎徳三宛て)	昭和8年6月8日	大研究会出品画の行方について	大矢峻嶺代筆 (大矢とし子)
69	封書 (大矢家から山崎徳三宛て)	昭和12年12月21日	礼状 (贈答の礼)	礼状 (贈答の礼)
70	封書 (大矢家から山崎徳三、千三宛て)	昭和17年10月13日	—	本状欠

表2 大矢峻嶺宛てはがき、封書

No.	資 料 名	時 代	内 容、その 他	備 考
1	はがき (安立和堂から大矢峻嶺宛て)	大正8年1月20日	林氏への伝言の依頼	
2	はがき (有井祥雲から大矢峻嶺宛て)	大正7年4月14日	画会での席上揮毫承知の件について	
3	はがき (有井祥雲から大矢峻嶺宛て)	大正15年1月15日	問合せの返事 (西村五雲の住所)	
4	封書 (石川龍三から大矢峻嶺宛て)	昭和6年5月18日	礼状	
5	はがき (石倉勝治郎から大矢峻嶺宛て)	昭和18年8月17日	立雛の図揮毫の依頼	
6	はがき (伊藤勝治郎から大矢峻嶺宛て)	年代不明1月16日	土肥氏の住所の問合せ	伊藤草白の本名
7	はがき (伊藤石華から大矢峻嶺宛て)	昭和19年6月21日	市展出品受付時刻の通知	
8	はがき (伊藤石華から大矢峻嶺宛て)	昭和36年1月7日	年賀状の返礼	
9	はがき (岩野平三郎から大矢峻嶺宛て)	大正14年6月11日	日本画紙の案内	印刷葉書
10	はがき (上田向陽から大矢峻嶺宛て)	大正7年4月9日	訪問時不在の詫びと要件の承諾について	
11	はがき (大石月湖から大矢峻嶺宛て)	昭和38年10月12日	近況報告と訪問日程の連絡	
12	はがき (大村廣陽から大矢峻嶺宛て)	大正6年1月14日	研究会への作品出陳の依頼	
13	はがき (大村廣陽から吉田硯堂、大矢峻嶺宛て)	大正6年2月18日	研究会出品画送付の通知	
14	はがき (奥田雀草から大矢峻嶺宛て)	昭和25年1月9日	年賀状	
15	はがき (奥村木巢から大矢峻嶺宛て)	大正8年1月7日	年賀状	
16	はがき (奥村木巢から大矢峻嶺宛て)	大正8年4月14日	絵画寄贈の礼状	
17	はがき (尾崎旭泉から大矢峻嶺宛て)	昭和45年9月11日	合作の礼と機嫌伺い	
18	はがき (小野竹橋から研究会幹事宛て)	大正9年3月18日	研究会欠席の詫び	
19	はがき (加藤英舟から大矢峻嶺宛て)	大正7年1月1日	年賀状	
20	はがき (加藤英舟から大矢峻嶺宛て)	大正7年4月12日	作品完成の通知	
21	はがき (金嶋桂華から大矢峻嶺宛て)	大正11年8月8日	支那旅行について	
22	はがき (川口呉川から大矢峻嶺宛て)	大正7年6月18日	研究会欠席と送付の通知	
23	はがき (川口呉川から大矢峻嶺宛て)	大正8年1月18日	研究会欠席について	
24	はがき (川本参江から大矢峻嶺宛て)	大正5年7月16日	謝罪	人物画付
25	はがき (川本参江から大矢峻嶺宛て)	年代不明6月24日	美統へ作品持参の報告	

No.	資 料 名	時 代	内 容、その 他	備 考
26	はがき(菊池行也から大矢峻嶺宛て)	昭和15年4月15日	見送りの礼状	
27	はがき(北上聖牛から竹杖会研究会幹事宛て)	大正6年3月12日	欠席の旨と代役の依頼文	
28	はがき(北上聖牛から大矢峻嶺宛て)	昭和3年10月23日	謝罪	
29	はがき(近藤宣彦から大矢峻嶺宛て)	昭和36年1月1日	年賀状	
30	はがき(西条長遊子から大矢峻嶺宛て)	昭和35年1月7日	年賀状	
31	はがき(西条隆治から大矢峻嶺宛て)	大正6年2月11日	近況報告と伝言の依頼	
32	はがき(西条八十から大矢峻嶺宛て)	大正6年1月3日	年賀状	
33	はがき(西条八十から大矢峻嶺宛て)	大正10年1月1日	年賀状	
34	はがき(榊原雨村から大矢峻嶺、大矢奥様宛て)	昭和36年1月6日	年賀状	
35	はがき(榊原苔山から大矢峻嶺宛て)	大正10年2月12日	贈答品預かりとすき焼き会について	
36	はがき(佐藤寛山から大矢、多賀宛て)	大正7年4月12日	研究会当直の代役依頼	
37	はがき(里見米山人から大矢峻嶺宛)	年代不明5月2日	送別の宴の礼	
38	はがき(神之島から大矢峻嶺宛)	昭和9年3月5日	送付の通知	
39	はがき(吹田憲一から大矢峻嶺宛て)	大正7年1月8日	写生会の課題について	吹田草牧の本名
40	はがき(吹田草牧から大矢峻嶺宛て)	昭和35年12月30日	年賀状	木版画付
41	はがき(高倉から大矢宛て)	大正6年1月29日	紋所の通知	
42	はがき(武内正之から大矢峻嶺宛て)	昭和17年8月30日	大東亜必勝奉祈願	
43	封書(竹内その子から大矢とし子宛て)	昭和10年9月28日	会合の案内	
44	はがき(徳田隣斎から大矢峻嶺宛て)	大正8年4月18日	研究会欠席の詫びと批評員代役の報告	
45	はがき(徳田隣斎から大矢峻嶺宛て)	昭和3年10月22日	松茸狩りの案内への礼状	
46	はがき(徳田隣斎から大矢峻嶺宛て)	昭和3年10月23日	松茸狩り欠席の返事	
47	はがき(戸田要正から大矢峻嶺宛て)	大正7年1月4日	年賀状	
48	はがき(土肥南浦から大矢峻嶺宛て)	年代日付不明	上海から旅の便り	
49	はがき(豊島停雲から大矢峻嶺宛て)	昭和3年10月24日	通知への返事、欠席の旨	
50	はがき(中田晃陽から大矢峻嶺宛て)	昭和29年9月23日	年賀の集いの時間について	
51	はがき(中田晃陽から大矢峻嶺宛て)	昭和29年12月13日	先生の法事日程についての相談	
52	はがき(中田晃陽から大矢峻嶺宛て)	年代不明10月16日	祝状の礼	
53	はがき(西村五雲から大矢峻嶺宛て)	大正7年1月2日	年賀状	
54	はがき(西村五雲から大矢峻嶺宛て)	大正6年1月2日	年賀状	
55	はがき(西村白雲から大矢峻嶺宛て)	大正8年10月11日	近況報告	
56	はがき(野々内保太郎から大矢峻嶺宛て)	昭和36年1月4日	年賀状	牛図付
57	はがき(橋本関雪から研究会宛て)	大正7年6月17日	研究会欠席と出品の通知	
58	はがき(華邨清芳から大矢峻嶺宛て)	大正6年6月7日	産業博覧会出品の祝状	
59	はがき(濱田観から大矢峻嶺、御内室様宛て)	昭和15年6月22日	目黒での峻嶺の様子について	人物画付(峻嶺)
60	はがき(濱田観から大矢峻嶺宛て)	昭和19年9月16日	軍人援護美術展の作品発送について	
61	はがき(濱田観から大矢峻嶺宛て)	昭和20年12月25日	出品についての詫び	
62	はがき(濱田観から大矢峻嶺宛て)	昭和23年8月17日	返事と草稿洋紙受け取りについて	
63	はがき(濱田観から大矢峻嶺宛て)	昭和27年8月2日	祝辞への礼	
64	はがき(東原方僊から大矢峻嶺宛て)	大正5年3月18日	研究会の帖簿について	
65	はがき(東原方僊から大矢とし子宛て)	昭和15年7月2日	雅叙園での制作と峻嶺の近況	人物画付(峻嶺)
66	はがき(廣田百豊から大矢峻嶺宛て)	年代日付不明	体調不良と欠席の旨	
67	はがき(堀井香坡から大矢峻嶺宛て)	昭和27年5月23日	見舞いについての礼	
68	はがき(堀井香坡から大矢峻嶺宛て)	昭和35年1月1日	年賀状	
69	はがき(堀井香坡から大矢峻嶺宛て)	昭和36年1月1日	年賀状	
70	はがき(星野空外から大矢峻嶺宛て)	昭和3年10月23日	近況報告と詫び状	
71	はがき(松本三橋から吉田硯堂、大矢峻嶺宛て)	大正6年2月13日	礼状と近況報告	
72	はがき(三木翠山から大矢峻嶺宛て)	大正6年2月26日	肖像について	
73	はがき(三木翠山から大矢宛て)	大正6年3月12日	肖像について	
74	はがき(三木翠山から大矢峻嶺宛て)	昭和27年4月14日	面会の都合についての問合せ	
75	はがき(三木翠山から大矢峻嶺宛て)	年代不明8月8日	近況報告	人物画付

No.	資 料 名	時 代	内 容、その 他	備 考
76	はがき(宮本□□から大矢峻嶺宛て)	年代日付不明	機嫌伺いと近況報告	
77	封緘奉書(宗像半之助から大矢峻嶺宛て)	大正15年4月21日	贈答の礼状	
78	はがき(山本紅雲から大矢峻嶺宛て)	大正6年2月16日	近況報告と研究会の作品手配について	
79	はがき(山本紅雲から大矢峻嶺宛て)	大正6年2月6日	北海道から旅の便り	
80	はがき(山本紅雲から大矢峻嶺宛て)	大正7年4月16日	席上画の件についての返答	
81	はがき(山本紅雲から大矢峻嶺宛て)	大正8年4月7日	写生の拝借の詫び	
82	はがき(山本紅雲から大矢峻嶺宛て)	大正9年4月28日	支那旅行について、便りの催促	
83	はがき(山本紅雲から大矢峻嶺宛て)	大正10年3月31日	近況報告と来遊の誘い	
84	はがき(山本紅雲から大矢峻嶺宛て)	昭和20年1月10日	制作分の配達依頼	
85	はがき(山本紅雲から大矢峻嶺宛て)	昭和36年1月8日	年賀状	
86	はがき(吉川観方から大矢峻嶺宛て)	大正7年1月1日	年賀状	
87	はがき(吉田硯堂から大矢峻嶺宛て)	大正5年2月1日	帰京予定の通知	
88	はがき(吉田硯堂から大村廣陽、大矢峻嶺宛て)	大正5年2月□日	帰京予定の通知	
89	はがき(吉田硯堂から大矢峻嶺宛て)	大正5年8月11日	書状の返礼と礼状	
90	はがき(吉田硯堂から大矢峻嶺宛て)	大正6年1月□日	画の送付の通知	
91	はがき(吉田硯堂から大矢峻嶺宛て)	大正6年1月24日	近況報告	水仙図付
92	はがき(吉田硯堂から大矢峻嶺宛て)	大正6年2月13日	帰京予定の通知	
93	はがき(吉田硯堂から大矢峻嶺宛て)	大正6年5月8日	近況報告	花図付
94	はがき(吉田硯堂から大矢峻嶺宛て)	大正6年8月□日	近況報告	百合図付
95	はがき(吉田硯堂から大矢峻嶺宛て)	大正7年3月18日	贈答の礼	
96	はがき(吉田硯堂から大矢峻嶺宛て)	大正7年4月4日	屏風制作の近況と送付の通知	
97	はがき(吉田硯堂から大矢峻嶺宛て)	大正7年4月7日	延引の詫び	
98	はがき(吉田硯堂から大矢峻嶺宛て)	大正7年4月16日	春の挨拶	櫻図付
99	はがき(吉田硯堂から大矢峻嶺宛て)	大正7年5月18日	近況報告と帰京予定の通知	紅葉図付
100	はがき(吉田硯堂から大矢峻嶺宛て)	年代不明1月18日	報知の延引について	
101	はがき(吉田硯堂から大矢峻嶺宛て)	年代不明8月20日	近況報告と帰京予定の通知	
102	はがき(吉田兆青から大矢峻嶺宛て)	昭和33年1月1日	年賀状	
103	はがき(差出人不明 大矢峻嶺宛て)	昭和4年9月18日	院展見物について	

表3 大矢峻嶺宛てはがき、封書(画材鞆から)

No.	資 料 名	時 代	内 容、その 他	備 考
1	はがき(阿部広基から大矢峻嶺宛て)	昭和24年8月23日	展覧延引の承諾	
2	はがき(大矢家から大矢峻嶺宛て)	昭和24年10月10日	作品依頼についての返答代筆の報告	大矢とし子か
3	はがき(大矢宅から大矢峻嶺宛て)	昭和24年8月9日	見舞状の催促と返信代筆の報告	大矢とし子か
4	はがき(大矢宅から大矢峻嶺宛て)	昭和24年8月11日	便りの内容の報告と来遊の勧め	大矢とし子か
5	はがき(大矢宅から大矢峻嶺宛て)	昭和24年8月16日	帰宅の催促	大矢とし子か
6	はがき(大矢宅から大矢峻嶺宛て)	昭和24年8月23日	知人訪問、用件など近況報告	大矢とし子か
7	封書(土井請夫から大矢峻嶺宛て)	昭和24年7月31日	画会終了の礼	
8	封書(榎岡平祐から大矢峻嶺宛て)	昭和24年8月1日	失言の詫びと作品の納品について	
9	封書(林魁一から大矢峻嶺宛て)	昭和24年5月25日	会員の申込と作品の依頼	
10	はがき(堀部齊治郎から大矢峻嶺宛て)	年代日付不明	御礼と揮毫の依頼について	未投函
11	封書(山崎徳三から大矢峻嶺宛て)	昭和24年8月26日	来遊の誘い	

表4 大矢家旧蔵書簡、はがき

No.	資 料 名	時 代	内 容	備 考
1	封書(足立玉樹から大矢峻嶺宛て)	年代・日付不明	近況報告と来遊の誘い	
2	封書(石川龍三から大矢峻嶺宛て)	昭和6年8月10日	礼状	
3	はがき(伊藤直治郎から大矢峻嶺宛て)	大正15年10月13日	帝展入選の祝状	
4	封書(梶浦逸外から大矢峻嶺宛て)	大正13年3月15日	訪問の都合伺い	
5	封書(梶浦逸外から大矢峻嶺宛て)	大正13年4月1日	肖像送付の礼状	
6	はがき(梶浦逸外から大矢峻嶺宛て)	昭和27年1月4日	年賀状	
7	はがき(近藤宣彦から大矢峻嶺宛て)	昭和42年1月1日	挨拶	
8	封書(西條隆治から大矢峻嶺宛て)	消印不明	西條隆治執筆原稿「説信」	
9	はがき(斎藤紫山から大矢峻嶺宛て)	昭和5年1月1日	年賀状	
10	封書(正眼寺から大矢峻嶺宛て)	大正15年2月18日	昭隠老子肖像送付の催促	
11	はがき(千宗興から大矢峻嶺宛て)	昭和32年1月31日	結婚3年目の挨拶	
12	はがき(千宗興から大矢峻嶺宛て)	昭和36年1月1日	年賀状	
13	はがき(千宗興から大矢峻嶺宛て)	昭和36年12月31日	年賀状	
14	封書(醍醐寺管長 平之亮禪から大矢峻嶺宛て)	昭和5年7月19日	作品寄進への礼状	
15	封書(東京美術学校文庫から大矢峻嶺宛て)	昭和6年9月10日	中華民国水害義捐の寄贈画依頼	印刷書状
16	はがき(長繩禮堂から大矢峻嶺宛て)	昭和41年6月18日	作品用立ての依頼	
17	はがき(樋口三樹三から大矢峻嶺宛て)	昭和38年1月2日	年賀状	
18	はがき(米山人から大矢峻嶺宛て)	昭和11年2月24日	祝状に対する礼	
19	はがき(八木月華から大矢峻嶺宛て)	昭和15年1月1日	年賀状	
20	封書(山下祥司から大矢峻嶺宛て)	昭和6年6月19日	—	本状欠

史料紹介

「禮物軌式」にみる「枝柿」「美濃柿」「甘干柿」について

可児 光生

季節の折に献上する「時献上」については、江戸時代の諸大名などに関する名鑑である「武鑑」にその記載があり、柿に関しては尾張家から「甘干柿」「美濃柿」「枝柿」が献上されていたことがわかっている。

文化十三年（一八一六）、尾張家によつて贈答儀礼の仕様である「禮物軌式」がまとめられ、現在徳川林政史研究所に収蔵されている。春十一品、夏九品、秋十六品、冬八品その他十八品の計六十二の品々が彩色入りで書かれ、献上の方法が示されている。

このほど美濃加茂市民ミュージアムでは「蜂屋柿その歴史と人々展」を開催し、それに際して「禮物軌式」の関係部分の閲覧の機会を得た。これまで、この史料のうち献上仕様の一部の図が紹介されるにとどまっていたが、徳川林政史研究所のご理解とご協力が得られたので、ここで「禮物軌式」における美濃の柿に関する本文部分を翻刻して紹介し、献上手順、「御拵の手続」などの様子の一端を明らかにしたい。春巻に「枝柿」、夏巻に「美濃柿」、秋巻に「甘干柿」が記載されている。

一 枝柿について

「枝柿」は「濃州蜂屋村之産同所製」とされ、年間（一二月の「新枝柿」から翌年の夏までのうち）三度献上された。柿は「御紋付絵符添状」とともに差し出される。その途中では「寄者御賄人」「御中間頭」「御用人衆」などの役職がそれぞれの務めをしたようである。「御拵の手続」は丁寧を極めている。柿を詰める箱は椗の椗目が使われ、文字通り寸分たがわず箱の大きさを

を定めている。

二 美濃柿について

「美濃柿」は「濃州蜂屋村産物」と記されている。枝柿と同様、詰める箱は椗の椗目が使われ、寸分が細かく指定されている。美濃柿は、生の柿で、おそらく甘柿であったと思われる。四枚の柿の葉によつて一つ一つ丁寧に包まれ、箱に詰められていた。一箱一三〇個ほどの美濃柿に対し、柿の葉が六百枚必要と記されている。

三 甘干柿について

「甘干柿」は、「甘干製品之皮柿は濃州蜂屋村産物」とされ、九月十月のうちに三度献上されている。「蜂屋村柿剥之者兩人」が「柿小屋」において「焚火」によつて甘干柿がつくられたことが、史料から知ることができる。甘干は「烏柿」（あまほし）ともいわれる。「和漢三才図絵」には「火に燻べて屋間に懸け、晒乾かす。あるいは火に燻べずに乾かしてもよい。いずれも黒色となる。未だ、霜（白粉）の生じないときに食べる。烏とは黒色をいうのである。」と記されている。

（凡例）

* 蜂屋柿その歴史と人々展」は、二〇〇八年二月一三日から二〇〇九年二月一日まで開催した。図録「蜂屋柿その歴史と人々展」参照。展覧会では蜂屋柿献上に関する史料として「禮物軌式」のほかに「献上物音信品取扱留帳」（岐阜市歴史博物館所蔵）と「献上枝柿の図」（美濃加茂市・日江井家文書）を紹介した。

* 史料の閲覧に関して徳川林政史研究所の神田映子氏に格別のご配慮をいただいた。また、史料の翻刻については一部寛真理子氏にご指導いただいた。心より感謝申し上げます。

* 史料の字間、行間等の体裁については掲載の都合上、一部変更した部分がある。

（かにみつお 美濃加茂市民ミュージアム）

〔禮物軌式 春〕

一 枝柿者濃州蜂屋村之産同所

製にて年中三度御献上之

御品候間十二月新枝柿より

翌夏迄御入用員数取調右者

至于時節江戸着候様四月

御国産物積之節尾州

御役所江申越於彼地太田

御代官所江寄者御賄人を以

為申越候事

一 至于時節箱詰老箱百人取調外家江

入鈎荷二仕立蜂屋村柿庄屋共より

尾州御役所江差越候付七里

宰領繼人足持にて御中間頭より

御指立之儀於彼地御届申上

候事

一 枝柿到着之節柿并御紋附

絵符添状共御中間頭より差出

候付相改為請取候事

但絵符之儀書付相添即刻

御目付方江為差出候事

一 枝柿到着之境御右筆組頭

中江寄者御賄人より為申届

并御拵方出来之日数見積

を以御献上日並之儀為相伺候事

一 御拵の手続八組子に安田打

乃真田を通し図のことし五重と

もに盤立に並べ柿をは

さみていれ図のことし五重とも

納畢て爰にて御用人衆御見分本乃

こたく組紐を諸わなに結び

安田打のさなだなりむすび目に紙封を

つけ御箱に納ふたを木

釘にて打附口張をし

四角く封判を捺す

其数貳拾なり右畢て

封判の数御賄頭并寄者御賄人

改候上昏袋添御長持江可入置事

一 御試

半紙しき

枝柿三 塗足打

白楊枝一本添

種をさり

庖丁をわたし

本のことくにして

うろこがたにすゆる

・・・ 図①②③④参照

進上 枝柿 尾張

枝柿箱 木品 樞紐目

打付蓋

一本貫

手なし

一重くり

長 一尺六寸五分

巾 一尺一寸四分

高 八寸三分

足高 五寸

組子箱五

木品椽柱目

さん蓋

下の重まわり

さんうら

紐通わけ

長 一尺五寸

巾 一尺三分

重高 一寸五分ツゝ

合印八上箱の口張の封印是なり

組子に藁こも敷たる図

藁の節を

そろへてあむ

ゆへ一筋つつ

打違わむべし

節二通

細糸三通

細糸仕切の下へなる

わらのふし

枝柿の図

せたを鋏にてはさむ

両の木口を小刀にてきる

右のことくこしらへて

藁の先にて

塵などを掃う

枝柿を組子に

おさめたる図如此

一仕切に

柿五ツゝ

一重にて二十

五重合て数百也

〔禮物軌式 夏〕

美濃柿 一箱

右入目

一 上り美濃柿箱

一 標銘

一 内張紙

一 美濃柿

一 柿の葉

一 くくしは

一 目張口張紙 巾一寸二分

巾六分

一 封判の数

一 袋紙

一 御色熨斗

一 御長持

一 棒

柿御拵之節入用

一 御布巾

一 塗臺

一 鉢

一 小刀

一 御盤立

一 御懸緒

以上

一 美濃柿者濃州蜂屋村産物

御入用員数取調四月御国産

物積之節尾州御役所江申越

彼地より太田代官所江寄物

御賄人より為申越至于時節

江戸表江御指下日限申来候様

同時ニ申添遣置候事

一 紅葉柿之葉御入用之節無

差支相渡候様兼て御用人衆江

御達可申上事

何月

御献上御用柿葉之儀ニ付御達申上候書付

御賄頭

紅葉

一 柿の葉

何千枚

右者御献上御用御座候御入用

之節戸山御屋敷方より相渡

候様仕度御達申上候

何月

御賄頭

一来幾日美濃柿尾州御差立

之筈彼地より為申越候ハバ

尤諸色取調置心配可有之事

一 蜂屋村庄屋共より尾州御役所江

日積を以柿差越候付御中間頭より

七里宰領繼人足持ニテ御差立
之儀前日御用人衆江御達申上
御用物者勿論御絵符并添状
とも当朝宰領之者江為引渡
候事

一御用物参着之上御絵符并
添状共御中間頭より御役所江
差出候付改為請取候事

御紋附

提絵符何枚

右者御献上美濃柿二添去

幾日尾州御差立今日致

参着候付差出之申候

九月幾日 御賄所

御絵符二書付添寄者御賄人より

御徒目付江為指出候事

一柿取調方出来之日積を以御献上

御日限御右筆組頭中江寄者

御賄人より為伺候事

一蜂屋村より柿指越候節一宛

柿の葉にて裏ミ来候付江戸

表にて御拵之節つつみたる

葉取捨兼て調置たる柿の

葉にてつつみくく芝にて十

文字にゆひ御箱に詰る

一御拵の手続ハまず御箱の

内張をし次に四方の目張
腰はりをし標銘出来の上

ふた裏を張さて美濃柿

を御箱に納爰にて御用人衆御見分次に蓋

を木釘にて打附口張をし封

判を四角く／＼に捺す其数式拾也

右畢て封判の数御賄頭并寄物

御賄人改候上御長持江入紙袋添て

下置事

一御試

半紙しき皮をむき堅にわりて

かまぼこのことく庖丁をわたす

美濃柿三白楊枝二本添塗足打

進上

美濃柿

尾張一

柿箱 本品 椗柱目

打付蓋

一本貫

手なし

一重くり

長 一尺六寸三分

巾 一尺一寸

高 八寸五分

足高 五寸

・・・図⑤参照

美濃柿

御箱につめたる図

美濃柿の図

柿仕立方手続

柿の葉を水にて洗

布巾にて拭ひ上下の端を

少はさむその図如右

柿の葉を我左の手の掌に一二三四の

ことく順々にくむ

一 (図)

二 (図)

三 (図)

四 (図)

次第のことくくむとか様になるを

まん中に柿を置

朱書のことく順につつめば

次のことく

前のことく

つつめば如此

くくしはを一筋裏より

あてて上へとり

十文字にとれば次のことし

両方の先を裏へまわして左右とり合て

捻れは次のことし

か様に捻りて

十文字の下に

はさみ先を

きれば次のことし

かくのことくなる

これ全図なり

これを打返して

上を上へし

御箱に順よく詰

〔禮物軌式 秋〕

一 甘干柿 一折

右入用

上り

一 甘干柿折 沓組 組子式

一 標銘

紅葉

一 柿の葉 五拾枚

一 甘干柿 式拾

一 浅黄安田打真田 五尺

一 紙封 沓

一 封判の数 八

一 袋紙 五枚

一 御色熨斗 沓

一 御長持 沓棹

一 棒 沓本

一 御懸緒 式筋

一 御盤立 沓脚

一 塗臺 式枚

以上

一 甘干製品之皮柿は濃州

蜂屋村産物にて九月十月之内

三度御献上之御品候間兼て

御入用員数取調右は至于

時節江戸表江可差下日割

前廉二可為申越旨調加四月

御国産物積之節尾州御役所江

申越於彼地太田御代官所江

寄者御賄人を以為申越候事

蜂屋村柿庄屋共より御届申上候皮柿

御番屋江差越御日割

半紙豎

書付

御柿日割

何百何拾 皮柿

内

幾ッ

但何荷二仕

九月幾日朝御番屋江着

幾ッ

但何荷二仕

九月何日朝御番屋江着

幾ッ

但何荷二仕

九月何日朝御番屋江着

御柿剥之者

御手伝

誰

右御柿剥之者九月何日蜂屋村

出立木曾路九日振江戸着為仕候

以上

蜂屋村御柿庄屋

何八月

同

何誰
同断

御賄所様

柿庄屋苗字認候儀文化十四年十一月

支配御代官所より差免候由其節御役所江

庄屋共御届申上候事

一 皮柿者箆詰二取調蜂屋村庄屋共

より兼て日割之通尾州御役所江

差越候付定日飛脚便をもつて

御中間頭より御差立之儀節々於

彼地御用人衆江御届申上候事

一 蜂屋村柿剥之者兩人九月

江戸表江罷下甘干製候付

皮柿御差下之日割書付彼地より

申越候上日積を以柿小屋并

諸色請取方御用人衆江御届

申上候事

九月

柿小屋并諸色之儀御達申上候書付

御賄頭

一 柿小屋

但造作共

一 鳴子板

貳枚

一 踏次

壹

一 細引

貳筋

一 両面薄縁

拾貳枚

一 町薄縁

貳枚

一 筵

三拾貳枚

一 屏風

かたし

一 竈

壹

一 小釜

壹

一 手桶

壹 柄杓共

一 手鹽

壹

一 水流

壹

右者御献上柿御拵御用候間

例年之通柿剥之者下着

当日より御用明迄請取申度

御作事方江被仰渡之儀

御達申上候

但柿剥之者来幾日頃下着仕候筈

九月

御賄頭

九月

行燈之儀御達申上候書付御賄頭

一行燈 壹艇 有明油共

右者柿剥所入用二付御廣間方

より相渡候様仕度御達申上候

九月

御賄頭

一 柿剥之者下着之上

向々江届方

一 御紋付提絵符老枚二書付

相添寄者御賄人より御徒目付江
為差出候事

一 柿剥之者下着当日より御用

濟迄於柿小屋焚火夜中

燈火并御臺所江同前御門

入夜五ツ時迄出入之御断亥刻札

老枚請取候儀御目付方江為

相届候事

一 柿剥之者下着当日夕より御用

濟まで御扶持式人分宛相渡

候様御蔵御証文之儀御届

申上候事

一 柿剥之者下着当日より為書

夜柿番御中間三人御用濟

まで請取度旨御届申上候事

一 柿小屋御作事方より請取候後

御役所より壁書為出候事

小奉書豎書

從是内江

御用無之者

一切不可入事

九月 寄物御賄人二為調柿剥

小屋入口二為出候事

一 皮柿到着之節々御役所江

柿剥之者呼上ケ為相渡候事

一 柿剥立候節并干揚出来栄

為見分寄物御賄人為見廻候事

一 柿干揚り方遅速など兼而前廣二

申上候様柿剥之者江精々為

申渡置尚更寄物御賄人折々

為見廻可申事

一 御献上者九月中一度十月中

式度都合三度二候得共年之

氣候二随ひ出来栄遅速

有之二よつて至于十月相

湊ひ御献上相濟候年柄茂

有之候付干揚り方見積を以

幾日頃御献上可然哉之境

無油断心配之儀寄物御賄人

を以柿剥之者江可為申渡候事

一 御折并真田之儀御献上三度之

入目兼て可設置事

附役方及手後候得共柿之

出来栄二不拘自然与御献上

及遅く候儀茂有之故本文

之通致手当候様可念入事

一初度甘干柿者

公方様右大将様御臺様

御簾中様江御献上二付員数

多候故尚更御拵方出来之日数

日積を以御献上御日並之儀

御右筆組頭中江寄者御賄人

より為伺候事

一御拵の手続ハまず折に安

田打乃真田を通し御盤立に

ならへ仕切の一間に柿の葉

杓枚つつしく次に甘ほし

柿を箸にてはさみ折へ

をさむ爰にて御用人衆御見分次にふた

をし紐を緒締にむすふ右

むすび目に昏封をつけ外

家の臺に載次に外家

を覆ひて左右の脇に二所

つゝ奉書にて封をし判を

捺す其数八ツなり右畢て

封判の数御賄頭并寄物

御賄人改候上御長持江入

紙袋を添可置事

一生乾の柿八葎際はなれ

安く手荒二不取扱可念

入事

一甘干柿も枝柿のことく葎

をはさみ軸をけつる御拵

出来の上八臺にならへ御懸

きぬを肥ひ清浄二可為

取扱事

一搔敷の柿の葉はみの柿の

せつ請取候餘計をかこひ置

別に不請取もし不足なれば

御用人衆江御届申上戸山

御屋敷奉行より請取候事

一搔敷の柿の葉組子仕切の

一間に杓枚つつしく

搔敷の

柿の葉

仕切の寸法に四方裁切

かねて分木をこしらへ

置御拵の節柿の葉

幾枚もかさねて上へ

右の分木をあて四方

裁切へし

裁切へし

裁切へし

一御試

半紙敷

甘干柿 三 塗足打

種をさり 包丁をわたす

白楊枝 式本添

進上

甘干柿

尾張

甘干柿折

外家 木品 樞柱目

長 一尺八分

巾 七寸八分

高 六寸

結目に紙封をつくる

組子折 木口樞柱目

下の重あけ底

紐通あり

長 九寸八分

巾 六寸八分

高 上 二寸三分

下 二寸九分

組子の図

組子に

甘干の柿

つめたる図

一重に拾つつ

二重にて都合

式拾也

甘干柿のへたをはさみ

軸をきる事枝柿の

仕立にかわる事なし

仕切の間間に

柿之葉一枚つつ敷

柿の葉

面の方

上になる

甘干折 木品 樞柱目

外家臺

二本貫

手なし一重くり

長 一尺八分

巾 七寸八分

縁高 六分

足高 三寸五分

一 柿剥之者御用濟之上為差登

候境三度目之分調進仕候後

御献上之前日為差登候事

向々江届方

一 尾州御賄頭江在府同役より右

柿剥之者為差登候境并道中

相用候 御紋付提絵符杓枚

為持差登候上着之上引揚

御目付方江指出候様可申越

事

一 柿剥之者兩人御関所通手形

調可相渡事

但手形扣名御賄人組頭姓名

相認候事

一 御紋付提絵符杓枚御目付方

にて請取柿剥之者江可為相渡事

但前日請取当朝添状相添

可為相渡事

一 当地発足境并柿小屋焚火

燈火御臺所口同前御門出入并

亥刻札杓枚揚之儀共御目付方江
可届事

但亥刻札二書付相添寄物御賄人
可持參事

一 柿小屋火揚之儀御徒目付江寄物

御賄人より為相届候上御下男

差遣火之元廻之者江火消候境

為見候上柿小屋并小屋入用之

諸色書付を以御作事方江

為引渡候事

一 柿番御中間三人右者柿剥

発足之翌日より引揚候付其段

御用人衆江御届可申上事

美濃加茂市民ミュージアム 紀 要

第 8 集

2009 年（平成 21）3 月発行

編集・発行

美濃加茂市民ミュージアム

岐阜県美濃加茂市蜂屋町上蜂屋3299-1(〒505-0004)

TEL 0574-28-1110 / FAX 0574-28-1104

<http://www.forest.minokamo.gifu.jp/>

印 刷 有限会社 永田印刷